



[目次]

第 57 回日本生態学会大会案内	1
記 事	
I. 56 回大会総会、全国委員会、各種委員会報告承認決議事項.....	8
A. 報告事項	
B. 承認事項	
C. 決議事項	
II. 第 56 回日本生態学会大会記録.....	22
III. 生態学琵琶湖賞報告	26
IV. 書評依頼図書.....	26
V. 寄贈図書.....	26
VI. 後援・協賛.....	26
お知らせ	
1. 公募.....	27
2. 第 25 回（2009）京都賞記念ワークショップ基礎科学部門シンポジウム 「進化・種分化・長期フィールド研究」.....	27
書 評.....	27
日本生態学会役員一覧.....	29
京都大学生態学研究センターニュース.....	33

日本生態学会第 57 回大会案内 -2

日本生態学会第 57 回大会（公式略称 ESJ57）は、大会実行委員会および大会企画委員会により、下記の要領で開催されます。この案内は、前回のニュースレター掲載の案内の内容に、大会日程、参加申込・諸経費の納入方法、各種締め切りの情報等を加筆したものです。最新情報は大会ホームページ（<http://www.esj.ne.jp/meeting/57/>）でご確認ください。

連絡先

〒 153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1
東京大学 大学院総合文化研究科 広域システム科学係 気付
日本生態学会第 57 回大会（ESJ57）実行委員会
担当：鷺谷いづみ（大会会長）、嶋田正和（大会実行委員長）
電子メール taikai@mail.esj.ne.jp
大会公式ホームページ <http://www.esj.ne.jp/meeting/57/>

本大会に関する問い合わせは、大会公式ホームページにある問い合わせページからお願いします。大会に関する最新情報は、ホームページで確認ください。

大会の概要と参加申し込み

本大会では、公開講演会、シンポジウム、フォーラム、一般講演（口頭・ポスター）、企画集会、自由集会、総会、受賞講演会、懇親会、高校生ポスター発表を行います。企画集会、自由集会につきましては、「**企画集会と自由集会**」をご覧ください。

大会参加、一般講演、企画集会、自由集会の申し込みは、大会公式ホームページを通じて行って下さい。詳細については、申し込みの流れの項を参照ください。

本大会は、日本生態学会員ではない方も参加できます。ただし、一般講演を行ったり、シンポジウム等の企画提案をするには、日本生態学会員になっていただく必要があります。本大会での講演・企画のためには、2010年度の会員であることが必要です。現在未入会の方は、大会参加申し込みと同時に入会申し込みを行い、2010年1月末までに会費の納入を済ませてください。入会手続きについては <http://www.esj.ne.jp/esj/> を参照していただくか、下記事務局までお問い合わせください。また、大会に参加するには、「大会規則」、「注意事項」等大会運営に関わる諸規定を遵守する必要があります。

〒 603-8148 京都市北区小山西花池町 1-8
日本生態学会事務局
TEL & FAX: 075-384-0250 E-mail: kaiin@mail.esj.ne.jp

大会プログラムは、2010年2月頃に日本生態学会員全員に郵送されることになっています。ただし、会費未納の場合はその限りではありませんので、プログラムの郵送を希望される会員は、必ず年内に会費を納入してください。

非会員には、事前に参加申し込みをしても、大会プログラムは郵送されません。2010年2月頃に大会公式ホームページで公開予定のウェブ版のプログラムと当日会場で販売する講演要旨集をご利用ください。

注意事項—重要：講演要旨集の別料金化

大会参加費の軽減化、紙資源の節約などの理由から、今大会では、講演要旨集を参加費とは切り離すことにな

りました。

前大会での会員アンケートの意向を反映して、**従来の大会と異なり、講演要旨集は別売り**（一般会員：3,000 円、学生会員：2,000 円）となります。講演要旨集の購入を希望される方は、参加申込みの際にあわせて申し込んでください。

なお講演要旨集は、大会ホームページで pdf で公開いたします。また HTML 版講演要旨は、日本生態学会第 57 回大会 (<http://www.esj.ne.jp/meeting/57/>) のサイトからいつでも自由にご覧いただけます。また大会プログラムに掲載されている QR コードから、インターネット接続機能を持った携帯電話等でご覧頂くことも可能です。

講演要旨集の冊子は当日販売も行いますが、数に限りがあり、先着順の限定販売とさせていただきます。講演要旨集が必要な方は、是非、事前購入していただくようよろしくお願いいたします。

今回の決定は、大半の会員の意向を反映し、紙資源の節約、大会参加費の軽減などを目的としたものであることを重ねてご理解ください。

会場・日程

本大会は、東京大学駒場キャンパスを主会場として 2010 年 3 月 15 日（月）から 20 日（土）に開かれます。主な日程は下記の予定ですが、シンポジウム、集会の数によって変更されることがあります。詳細はプログラム、公式ホームページで、追ってお知らせしますので、確認ください。

- 3 月 15 日（月） 駒場キャンパス 各種委員会、一般講演（ポスター）、企画集会、自由集会
- 3 月 16 日（火） 駒場キャンパス シンポジウム、一般講演（口頭・ポスター）、企画集会、自由集会
- 3 月 17 日（水） 駒場キャンパス シンポジウム、一般講演（口頭・ポスター）、企画集会、高校生ポスター発表、自由集会、懇親会
- 3 月 18 日（木） 駒場キャンパス 総会・授賞式、受賞講演、一般講演（口頭・ポスター）、企画集会、自由集会
- 3 月 19 日（金） 駒場キャンパス シンポジウム、一般講演（口頭・ポスター）、企画集会、フォーラム、自由集会
- 3 月 20 日（土） 本郷キャンパス（安田講堂） 公開講演会

申し込みの流れ

参加申し込みは、大会公式ページ (<http://www.esj.ne.jp/meeting/57/>) からお願いします。10 月 1 日から受付を開始します。事前登録の締め切りは 2010 年 2 月 18 日午後 5 時・時間厳守です。

登録が完了すると大会登録番号が発行されます。この番号は参加費の振り込み、要旨の登録、各種問い合わせ、確認メールの再発行などで必要となります。登録時にご自分で設定するパスワードとあわせて、管理にご注意ください。

一般講演を希望する場合は、登壇者（ポスター発表の場合は主たる説明者）が参加申し込みとあわせて講演申し込みを行ってください。締め切りは 11 月 13 日（金）の午後 5 時厳守です。シンポジウム・企画集会の講演は、企画者がまとめて申し込みますので、各講演者は大会参加申し込みのみ行ってください。参加申し込みを済ませないと、講演要旨の登録ができませんのでご注意ください。

なお、講演要旨集の購入を希望される方は、大会参加申し込みフォームの要旨集購入希望欄にチェックをお願いします。

※ 上記の講演要旨集の別途料金化の項を参照

申し込みなどの締め切り

各種申し込みの締め切りは以下の通りです。

- 企画集会、自由集会申し込み： 2009 年 10 月 23 日（金）17:00
- 一般講演申し込み： 2009 年 11 月 13 日（金）17:00

講演要旨登録： 2010年1月8日（金）17:00
事前登録・要旨集購入申し込み：2010年2月18日（木）17:00
プレゼンファイル登録： 大会の数日前

参加申し込み以外の各種申し込み開始は、締め切りの1ヶ月前程度から受付ける予定です。これらのスケジュールに変更がある場合もありますので、適宜、大会ホームページで確認ください。

諸経費の金額と支払い方法

大会参加費（講演要旨集の代金を含みません）

2010年2月19日（金）まで：一般 会員 5,500円 非会員 6,000円
学生（会員・非会員とも） 3,000円
大会当日：一般（会員・非会員とも） 8,000円
学生（会員・非会員とも） 5,000円

講演要旨集代金（冊子体） 一般（会員・非会員とも） 3,000円
学生（会員・非会員とも） 2,000円

懇親会費

2010年2月19日（金）まで：一般（会員・非会員とも） 7,000円
学生（会員・非会員とも） 5,000円
大会当日：一般（会員・非会員とも） 8,000円
学生（会員・非会員とも） 6,000円

講演要旨集のみ 3,000円（大会終了後に送付します。事前にご連絡ください）

*会員とは2010年度に日本生態学会会員である方を指します。大会参加申し込みの時点で非会員であっても、同時に入会申し込みを行い、2010年1月末までに学会費の支払いを済ませた方には、会員の金額が適用されます。入会手続きについては、[大会の概要と参加申し込み]の項をご覧ください。

大会参加費等の支払いは、銀行振込をご利用いただきます。銀行振込に必要な情報は、ウェブでの参加登録時にご案内するほか、大会ホームページでもお知らせします。振込の際には、ウェブでの参加登録時に発行される登録番号を振り込み者の名前とともに記入してください。

企画集会と自由集会

第57回大会では、前回大会と同じ要領で、企画集会と自由集会を募集します。企画集会と自由集会は一括して募集され、受付後に企画者の希望を考慮し、大会企画委員会によって企画集会と自由集会に割り振られます。下記の趣旨をご理解のうえ、奮ってお申し込みください。

企画集会

- ・企画集会には、大会参加費を支払った人に限って参加できます。
- ・企画集会の個別の講演の要旨は、講演要旨集に掲載されます。全体の趣旨説明と概要もプログラムと講演要旨集に掲載されます。
- ・企画集会の他の要件は、自由集会と同じです。一般講演、シンポジウムなどとの重複発表は認められますが、原則として日程の調整は行いません。

自由集会

- ・自由集会では、全体の趣旨説明と概要のみがプログラムと講演要旨集に掲載され、個別の講演の要旨は掲載されません。
- ・一般講演、シンポジウムなどとの**重複発表は認められますが**、原則として日程の調整は行いません。

企画集会、自由集会ともに、企画者はC会員を含む日本生態学会会員に限りです。

企画集会または自由集会の開催を希望される方は、2009年10月23日（金）17:00までに大会公式ホームページからお申し込みください。

いずれの集会についても、大会企画委員会は内容に関与しませんが、概要などに特定の個人を傷つける内容を含むと判断されるものについては、その限りではありません。

企画集会、自由集会とも開催時間は約2時間の予定です。

企画集会、および自由集会には、3月15日（月）～19日（金）を充てる予定です。なお、自由集会の時間枠は、大会初日の各種委員会や全国委員会と並行した時間帯等に設定される可能性が高くなります。

提案された企画集会・自由集会の数が会場の収容可能数を上まわる場合には、同一会員が重複して複数の集会の企画者となっている提案からご遠慮いただきます。次に、大会シンポジウム企画者による提案にご遠慮いただきます。それでも数が多い場合には、自由集会は抽選によって採否を決定します。

開催の可否については、11月20日（金）までにメールでご連絡します。

フォーラム

学会内の各種委員会等によって企画されるフォーラムを数件開催する予定です。フォーラムとは、各種委員会から提案され、生態学会が取り組んでいる生態学に関連する課題について広く会員の意見を募り、会員相互の情報共有を促すことや、広範な議論により学会内の合意を形成することを目指すものです。なお、フォーラムの企画やフォーラムでの話題提供は、**重複講演制限の対象となりません**。

一般講演

一般講演には口頭発表とポスター発表があります。申し込み時に希望をお聞きますが、会場の都合でご希望に沿えない場合もあります。

口頭発表では、英語での発表・討論を経験する機会を提供し、日本語を解さない参加者との交流を図るために、英語での発表を歓迎します。ただし、英語での発表の申し込み数によっては、分野にこだわらずに英語での発表を集めたセッションに回っていただく場合があります。

発表内容に応じて会場・時間の割り振りやポスター賞のグループ分けを行うため、発表申し込み時に適切な分野を以下のうちから3つまで選んでいただきます。**分野分けについて追加の要望が多数ある分野は、企画委員会で検討しますので、ご要望があればお寄せください。**

群落／植物個体群／植物生理生態／植物繁殖／植物生活史／送粉／種子散布／菌類／微生物／景観生態／遷移・更新／フェノロジー／動物と植物の相互関係／進化／種多様性／数理／動物群集／動物繁殖／動物個体群／動物生活史／行動／社会生態／分子／古生態／保全／生態系管理／外来種／都市／物質生産／物質循環／生態学教育・普及／英語（分野は不問）

注意：

- ・一般講演の演者（登壇者及び主たる説明者）は、日本生態学会A会員とB会員に限りです（共同発表者は会員である必要はありません）。
- ・一人で二つ以上の講演の演者になることはできません（共同発表者になることは差し支えありません）。
- ・さらに、シンポジウムの企画者・講演者は**一般講演は行えません（口頭・ポスターとも）**。これらの制限は、

いずれも限られた場所と時間を分け合って使うための措置ですので、ご了承ください。

口頭発表の方法

口頭発表は、会場備え付けの機器を使用したマイクロソフト・パワーポイントあるいはPDFによる発表とします。持ち込みのコンピューターは使用できません。発表用ファイルの登録方法などは現在検討中ですが、登録締め切りは大会開始の数日前となる予定です。詳細は、大会ホームページで追ってご案内します。

ポスター発表の方法

ポスターボードは縦長（90cm x 210cm）のものを使用する予定です。ポスター発表は、大会期間中に3部に分けて行う予定です。3部を合計して約1,000件のポスター発表を収容できる予定です。ポスター発表の申し込み数が収容可能数を超えた場合は、一部の申し込み者の方に、口頭発表への変更をお願いすることがあります。

ポスター賞

若手研究者を奨励するために、優秀なポスター発表に賞を贈ります。ポスター賞の審査対象は、ポスター賞に応募した発表に限られます。ポスター賞に応募できるのは、主たる発表者が以下の条件を満たしている場合とします。(1) 学生・院生ならびに学位（学士・修士・博士）取得（もしくは卒業・修了）後2-3年程度までの会員であること。(2) 過去の生態学会大会におけるポスター賞の受賞歴が無いか、もしくはポスター賞「優秀賞」の受賞歴が1度までの者とする。この応募資格については、下記をご参照ください。また、詳細は大会プログラムに掲載しますので、ポスターを準備するときの参考にしてください。

日本生態学会ポスター賞応募資格の見直しについて

第57回大会（東京大会）より、主たる発表者のポスター賞応募資格について以下の条件を設けることになりました。

1. ポスター賞に応募できるのは、学生、大学院生、学位取得後（もしくは卒業・修了後）2-3年程度までの会員とする。
2. 過去にポスター賞「最優秀賞」受賞者ならびに「優秀賞」を2回以上受賞した者は、上記の条件を満たしていても応募できないものとする。

応募に制限を設けた大きな理由のひとつは、近年応募者が急増し、ポスター賞の審査に要する負担が著しく高まったためです。ポスター賞の審査は、ひとつのポスターあたり3名以上の審査員による評価を総合して評点されます。ポスター審査作業は完全なボランティアであり、大会参加費を払っての参加の傍ら、審査時間を捻出して協力頂いています。盛岡大会では、545件のポスター賞応募があり、120名以上の方に審査員を引き受けていただきました。審査員の選定作業には、大変な手間と時間を費やしてきました。また、審査員は限られた時間内に多くの（最大20題）ポスターを審査するため、自分の興味がある発表やシンポジウムに参加したり、学会参加者と議論する時間を束縛されるという弊害も生じてきました。さらに、ポスター賞を連続受賞する人も多く、より多くの若手研究者へ受賞の機会を与えるべきであるとの要望が多く寄せられたことも背景にあります。このような問題点を改善するために、今回このような応募の制限を設けることになりました。

ポスター賞設定の目的は、若手研究者への奨励と発表技術の向上を目指すためのものでした。ポスター賞は2002年の仙台大会（第49回大会）に始まり、今年3月の盛岡大会で丁度一巡してきたこととなります。多くの方が実感しているように、この間、生態学会のポスター発表のレベルは飛躍的に高まり、ポスター賞の当初の目的は確実に達せられていると思います。

一方で、若手研究者の関心がポスター発表に集中し、口頭発表の経験を十分に積む機会が減っているのも事実です。「毎回ポスター発表に応募しているため、口頭発表経験がない」という声も度々耳にします。すべてのデータを広げ、時間的に制約に縛られずに説明できるポスター発表と、限られた時間枠で研究内容を順序立てて説

明しなくてはならない口頭発表では、自ずと発表技術が違ってきます。若手研究者は、ポスター発表を一通り経験したならば、次は是非、口頭発表の技術も習得して、さらには英語での発表にも積極的にチャレンジして欲しいと思います。そして何よりも、学会発表した研究を学術論文として公表するための努力に全力を尽くして下さい。ポスター発表を踏み台にして、研究者としてのステップを高めていくことができれば、本当の意味でポスター賞が機能していることになるでしょう。今回の応募制限の設定には、若手研究者へのこのような期待も込められていることを理解してもらえたらと思います。

高校生ポスター発表「みんなのジュニア生態学」募集

日本生態学会第57回大会（東京）では、高校生のポスター発表会「みんなのジュニア生態学」を開催します。大会会期中に高校生にポスター発表をしていただき、生態学に関連する諸分野の研究者や学生との交流を通して、生態学全般への関心をもっていただくのが本企画のねらいです。生き物の生態や環境に関わる生物学の内容であれば、どのような分野や題材の発表でも大歓迎です。

- 【日 時】 2010年3月17日（木） 13時～15時30分、成績発表・表彰式（15時45分～16時）
- 【会 場】 東京大学教養学部（駒場第1キャンパス）第2体育館
- 【参加費】 無料。発表者の全員（人数に制限なし）および付き添いの教員1名は、大会参加費が免除されます。
- 【発表資格】 高等学校または高等学校に相当する教育機関に在籍する生徒であること。国籍は問いません。
- 【発表内容】 生態や環境に関わる生物学の内容であれば、なんでも受け付けます。研究成果でなくても、諸活動の計画、現状、または問題点などの中間報告でも結構です。
- 【発表方法】 本大会の指定するパネルサイズに納まるポスターであること。発表者（複数可）は、発表時間帯にポスターの説明を口頭で行ってください。
- 【コメンテーター】 関連領域の選考委員会（最低1名）が各ポスターを担当し、生態学の視点からコメントやアドバイスをします。
- 【ポスター賞】 選考委員会が内容を評価し、発表されたポスターにはすべてに表彰状を出し、とくに優秀な発表は「最優秀賞」として表彰します。

■高校生のポスター発表会「みんなのジュニア生態学」の申込み手順

2010年12月4日（金）までに電子メールで件名に『高校生ポスター発表申込』と記入して、下記の内容を以下のメールアドレスに送ってください。早めのお申し込みをよろしくお願いいたします。

- (1) ポスターのタイトル
- (2) 発表要旨（日本語で500字以内）
- (3) 発表者全員の氏名、よみがな
- (4) 代表者（または引率教員）の所属
- (5) 付き添いの教員の有無
- (6) 代表者（または引率教員）の郵便番号／住所／電話番号
- (7) 代表者（または引率教員）のメールアドレス（携帯電話のアドレスは不可）

【送付先／お問合せ先】 高校生ポスター発表に関する問合せ先

日本生態学会 生態学教育専門委員会・委員長 嶋田正和

〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

東京大学 大学院総合文化研究科 広域システム科学系

TEL：03-5454-6003、6796

E-mail：mshimada@balmer.c.u-tokyo.ac.jp

公開講演会「なぜ地球の生き物を守るのか？—生物多様性条約が守る自然の価値」

生物多様性条約をテーマとした公開講演会を以下の日程と予定で行います。

日本生態学会第13回公開講演会

「なぜ地球の生き物を守るのか？—生物多様性条約が守る自然の価値」

場所：東京大学本郷キャンパス 安田講堂

日時：2010年3月20日（土）13時～17時

講演：矢原徹一（九大）、梶光一（農工大）、宮下直（東大）、高村典子（国環研）、仲岡雅裕（北大）

パネル討論：講演者5名、環境省、吉田正人（江戸川大・IUCN日本委員会）

司会：松田裕之（横国大）、鷺谷いづみ（東大）

懇親会

2010年3月17日（水）にセルリアンタワー東急ホテルで懇親会をおこないます。懇親会会場は、渋谷駅から歩いて5分のところにあります。渋谷周辺では最大の会場です。たくさんの方々のご参加をお待ちしております。

託児所

これまでの大会と同様に、大会主会場の駒場キャンパス内に託児室を設置する予定です。開設時間や申し込み方法などの詳細は、大会ホームページで追ってご案内します。

エコカップ2010

大会サテライト企画として、3月20日（土）に東京大学本郷キャンパス内の御殿下記念館ジムナジウムにて、親善フットサル大会 エコカップ2010が行われます。主催はエコカップ2010実行委員会です。詳細は追ってホームページでお知らせします。

宿泊・交通案内

東京での開催であるため、**宿泊の斡旋・交通手段の手配は一切いたしません**。各自でご準備くださるようお願いいたします。

ご意見

大会企画委員会では、大会運営についてのご意見を随時受け付けています。大会公式ホームページにある問い合わせページからお寄せください。

記 事

I. 日本生態学会大会総会（2009年3月20日、参加者約150名）および全国委員会、各種委員会において報告・承認・決議された事項

A. 報告事項

1. 事務局報告

a. 庶務報告（2008年4月～2009年3月）

1. 日本学術振興会へ平成19年度科研費（出版助成金）実績報告書を送付した（4月1日）
2. 生態誌編集委員候補田中健太氏および保全誌編集委員候補三橋弘宗氏・藤井伸二氏の就任が全国委員会にて承認された（4月7日）
3. 日本学術振興会より平成20年度科研費（出版助成金）の決定通知があった（6,900,000円）（4月8日）
4. ER編集委員候補清和研二氏・菊沢喜八郎氏・大塚俊之氏の就任について全国委員会にて承認された（4月18日）
5. 第15回琵琶湖賞運営委員会を滋賀県庁にて実施した（6月2日）
6. 国際シンポジウム「侵略的外来哺乳類の防除戦略～生物多様性の保全をめざして～」への後援名義使用を会長名で許可した（6月3日）
7. 学会賞選考委員会新規委員として辻和希・津田みどり・永田俊氏の3氏が全国委員会の推薦投票により選ばれた（7月31日）
8. 将来計画委員の2010年3月までの任期延長が全国委員会にて承認された（8月10日）
9. 学術振興会より平成19年度科研費補助金（学術刊行物）についての実地調査が京都事務局にて行われた（9月12日）
10. 2010年以降のEcological Research出版について出版社と面談した（10月7日・8日）
11. 平成21年度科研費補助金（学術刊行物）説明会に参加した（10月9日）
12. 保全生態学研究次期編集委員長として角野康郎氏の就任（任期：2009年4月～2011年12月）が全国委員会にて承認された（10月10日）
13. 生態学琵琶湖賞の公募を行い、締め切りまでに5名の応募を受付けた（10月15日）
14. 2012年米陸水海洋学会夏季大会の日本招致活動について支援することが全国委員会にて承認された（10月22日）
15. 会費の銀行引落とし申請会員へ引落とし通知はがきを送付およびメール送信を行った（11月6日）
16. 学術振興会および文部科学省に平成21年度科研費（学術刊行物）計画調書など申請書類一式を送付した（11月7日）
17. 学会賞選考委員に推薦された学会賞・宮地賞・大島賞受賞候補者の受賞が全国委員会にて承認された（11月26日）
18. 大会企画委員会から提案の「日本生態学会大会規則（案）」が全国委員会にて承認された（12月10日）

19. 次期保全生態学研究編集委員候補者全員の就任が全国委員会にて承認された（12月24日）
20. 会計監事候補の夏原由博氏が全国委員会にて承認された（1月16日）
21. 庶務幹事候補の江口和洋氏および会計幹事候補の上野高敏氏が全国委員会にて承認された（1月16日）
22. ER電子ジャーナルへのアクセスに必要な個別Tokenを会員に発送した（1月19日）
23. 京都事務局にて新旧事務局の引継ぎを行った（1月27日）
24. 第7回生態学会功労賞候補者の中根周歩氏の受賞が全国委員会にて承認された（3月2日）
25. 全国委員会にて常任委員会候補原登志彦氏と湯本貴和氏が承認された（3月16日）

* 京大生態研などへの共同利用・研究拠点申請の要望書提出5件、各種集会へ後援・共催の名義使用9件、論文・図などの転載7件、事務局ミーティング3件

b. 2007年度学会誌発行状況、会員数、会費納入率

(1) 学会誌発行部数および配本内訳(2008年12月末現在)

日本生態学会誌 58 巻

	1号	2号	3号
発行部数	3750	3720	3750
配本部数	3733	3710	3707
残部数	17	10	43

Ecological Research Vol.23

	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6
発行部数	3620	3600	3600	3600	3570	3570
配本部数	3615	3595	3588	3586	3568	3568
残部数	5	5	12	14	2	2

保全生態学研究 13 巻

	1号	2号
発行部数	1350	1350
配本部数	1312	1318
残部数	38	32

配本内訳

	日本生態学会誌		Ecological Research		保全生態学研究	
	58巻3号		Vol.23 No.6		13巻2号	
	配本冊数	未配本冊数	配本冊数	未配本冊数	配本冊数	未配本冊数
一般会員	2556	59	2511	62	1014	17
学生会員	834	116	844	119	202	26
団体	123	0	123	0	30	0
国外個人会員	40	1	40	1	4	0
国外団体会員	0	0	0	0	0	0
賛助	1	0	1	0	0	0
小計	3554	176	3519	182	1250	43
名誉会員	4	0	4	0	4	0
寄贈交換	56	0	45	0	56	0
購読	93	0	0	0	8	0
小計	153	0	49	0	68	0
合計	3707	176	3568	182	1318	43

(2) 会員数 (各年度 12 月末現在)

	2007 年							2008 年						
	一般A	B	C	学生A	B	C	合計	一般A	B	C	学生A	B	C	合計
北海道	201	69	22	79	20	4	395	193	66	22	83	21	4	389
東北	127	41	7	43	6	2	226	123	46	10	50	6	2	237
関東	668	295	85	200	79	12	1339	666	304	84	245	76	9	1384
中部	269	131	32	84	19	7	542	261	133	29	108	29	4	564
近畿	308	144	24	177	29	7	689	308	156	29	181	39	7	720
中四国	164	67	9	83	6	5	323	152	73	7	78	9	4	310
九州	194	56	12	52	14	2	330	185	61	13	77	15	1	352
小計	1931	803	191	718	173	39	3855	1888	839	194	822	195	31	3969
団体				A107	B24	C5	135				A99	B24	C6	129
国外団体							0							0
国外一般							41							46
同上国内扱い							0							0
賛助							1							1
名誉							3							4
小計							180							180
合計							4035							4149

(3) 会費納入率 (各年度 12 月末現在)

	2007 年		2008 年	
	一般	学生	一般	学生
北海道	92.8	71.8	94.7	59.3
東北	93.1	66.7	93.3	69.0
関東	90.7	72.8	92.0	68.8
中部	93.1	61.8	92.0	70.9
近畿	92.2	79.8	92.7	70.9
中四国	94.1	70.2	90.5	62.6
九州	91.2	72.0	91.5	71.0
平均率	92.1	72.4	92.3	68.2

c. 会計報告 (2008 年 3 月～2009 年 2 月)

- 第 12 回宮地賞 4 名および第 1 回大島賞受賞者 2 名へ賞金 10 万円ずつを送金した (3 月 25 日)
- Ecological Research Vol.23 No.1-2 直接出版費および英文校閲費としてシュプリング社へ 5,510,400 円を支払った (3 月 27 日)
- Ecological Research Vol.22 の Editorial Manager 使用料としてシュプリング社へ 541,800 円を支払った (3 月 27 日)
- 松山大会開催における地区還元金として 500,000 円を中四国地区会へ支払った (4 月 18 日)
- シュプリング社より 07 年還元金として 1,022,653 円の振込があった (4 月 28 日)
- 国立情報学研究所より CiNii 機関定額制利用還元金として 120,827 円の振込があった (5 月 9 日)
- 日本生態学会誌 58 巻 1 号印刷費として土倉事務所へ 1,107,225 円を支払った (6 月 12 日)
- 土倉事務所へ保全誌 13 巻 1 号およびニュースレター No.15 印刷代として 1,557,674 円を支払った (7 月 22 日)
- 東京化学同人より「生態学入門」出版印税として 522,648 円が振込まれた (7 月 25 日)

- 2008 年前期の地区会費と地区還元金を各地区会に振込んだ (8 月 12 日)
- 土倉事務所へ生態誌 58 巻 2 号およびニュースレター No.12 印刷代として 1,212,120 円を支払った (9 月 10 日)
- 土倉事務所へニュースレター No.16 印刷代として 457,537 円を支払った (10 月 14 日)
- みずほファクターの口座引落しにより 420 名分の次年度会費 4,777,500 円の入金があった (12 月 12 日)
- シュプリング社へ 2008 年 3-6 号分の出版費として 10,935,748 円を支払った (12 月 16 日)
- INTECOL2008 年会費として 370,480 円を支払った (12 月 19 日)
- 土倉事務所へ生態誌 58 巻 3 号印刷代として 1,555,312 円を支払った (12 月 26 日)
- 土倉事務所へ保全誌 13 巻 2 号印刷代として 1,615,950 円を支払った (12 月 26 日)
- 2008 年度の会計監査が学会事務局で行なわれ、会計は適正に行なわれたことが確認された (1 月 27 日)
- (株) アライブネットへレンタルサーバ年間利用料として 403,000 円を支払った (1 月 29 日)
- 福岡大会より大会残金 251,262 円が送金された (1 月 20 日) 土倉事務所へニュースレター No.17 印刷代として 282,975 円を支払った (2 月 3 日)

2. 大会企画委員会

- 次期体制 (2009.4.-2010.3)
 広告・スポンサーを開拓する広報部会を新設し、新委員 16 名を加えた 49 名となる。
 (新委員会の編成については日本生態学会役員一覧参照)
- 来年の東京大会 (JES57) で、高校生ポスター発表会を試行する。
- 北海道地区と決まっていた 2011 年大会 (JES58) は札幌で 3 月に開催予定。
- 2012 年 JES58 の EAFES5 同時開催にむけて、各部会に EAFES 担当を置き対応する。
- 経費節減、資源節約のため、講演要旨集の印刷体を廃止し、完全電子化を検討している。
 講演要旨集作成経費比較
 印刷体作成費 (現在) : 300 万円 (印刷費 : 230 万円、編集費 : 70 万円)
 CD 要旨集 (PDF 版) : 130 万円 (編集費 : 70 万円、CD 焼付 : 60 万円)
 CD 要旨集 (HTML 版) : 60 万円 (CD 焼付 : 60 万円)
 オンラインのみ : 0 円
 講演要旨の電子化に関するアンケートを行った (中間報告)
 印刷体講演要旨集の廃止 (賛成 255 名 反対 28 名)
 配布をやめ、オンライン版のみにする (賛成 226 名 反対 57 名)
 東京大会では印刷体の完全廃止も考えていたが、段階的な廃止とし、希望者だけへの配布も検討している。
 (文責 : 永田尚志)

3. Ecological Research 刊行協議会

日時：2009年3月17日（火）14：00～16：00

議題：

1. 事務局報告

年間投稿数の推移

年度	投稿数	通常論文
1998	66	66
1999	106	106
2000	130	130
2001	195	168
2002	166	166
2003	185	169
2004	223	209
2005	341	330
2006	416	362
2007	418	416
2008	427	412

新規投稿の Decision までの期間

(2008.1.1 から 2008.12.31 まで)

	Total Decision	%	Average time
Accept as is	1	0.2	106
Revision	136	31.5	72
Reject	295	68.2	47

2. 出版社報告（シュプリンガーより）

IF：2007 = 1.053

：2008 = 1.096（試算）

*ER について、日本人の引用数が少ないとの報告を受けて、全国委員会より学会員に引用を促すことが提案された。

3. Ecological Research Award 2008 受賞について

受賞論文（4編）

① pp.607-614

Authors: Noriko Tamura and Fumio Hayashi

Title: Geographic variation in walnut seed size correlates with hoarding behaviour of two rodent species

② pp.1039-1049

Authors: Masashi Murakami, Toshihide Hirao and Akiko Kasei

Title: Effects of habitat configuration on host-parasitoid food web structure

③ pp.3-10

Authors: Akiko Satake and Ottar N. Bjørnstad

Title: A resource budget model to explain intraspecific variation in mast reproductive dynamics

④ pp.151-158

Authors: Maki Suzuki, Tadashi Miyashita, Hajime Kabaya, Keiji Ochiai, Masahiko Asada and Takeshi Tange

Title: Deer density affects ground-layer vegetation differently in conifer plantations and hardwood forests on the Boso Peninsula, Japan

（文責：河田雅圭）

4. 日本生態学会誌刊行協議会

日時：2009年3月17日（火曜日）14：00～16：00

場所：岩手県立大学委員会室1（2階202）

出席者：堀良通（編集委員長）、山村靖夫（編集幹事）、北出理（編集幹事）、森野浩（編集幹事）、池田浩明、沖津進、奥田昇、古賀庸憲、鈴木まほろ、辻和希、野田隆史、日浦勉、田中健太、遊磨美由紀（編集事務）、天野貴子（土倉）

議題

1. 2008年1月-12月投稿状況

投稿数合計 19 受理 14（但し、連載記事は含めていない）

2008年12月31日現在の投稿状況

	原著	総説	特集	学術情報	意見	合計
投稿総数	3	5(3)	6	5	0	19
受理	2	5(3)	3	4	0	14
却下	0	0	0	1	0	1
審査中	1	0	3	0	0	4

（カッコ内の数字は受賞総説）

2. 3月号（59巻1号）の進捗状況

・原著論文1本、総説2本、特集1本、学術情報、連載3件を予定している。

3. 7月号、11月号について

・原著論文、特集3本、連載各3件などを予定している。
・まだまだ投稿が少ないので協力をお願いしたい。

総説依頼状況

学会賞受賞者3名より生態誌への総説投稿予定あり

第7回日本生態学会賞受賞者

和田英太郎（地球環境フロンティア研究センター）

第13回日本生態学会宮地賞受賞者

森 章（横浜国立大学大学院環境情報研究院）

「攪乱生態学が繻く森林生態系の非平衡性」

第2回日本生態学会大島賞受賞者

綿貫 豊（北海道大学水産科学研究院）

「気候変化によるフェノロジーのマッチ・ミスマッチが海鳥の雛成長の年変化を説明する」

連載の継続

担当者 田中健太：野外研究サイトから

担当者 鈴木まほろ：博物館と生態学

担当者 山道真人：始めよう！エコゲノミクス

特集の依頼

今年のプログラムから18件を選び特集の投稿を依頼した。

下記の集会から前向きな返事があった。

S02 生物の空間分布・動態と生態的特性との関係：

マクロエコロジーからの視点

S07 水田をめぐる群集生態学最前線—ミクロからマクロまで

S20 菌類・植食者などとの相互作用が作り出す森林の種多様性

T09 砂堆と砂浜の自然と生物多様性

T10 多様な菌類研究が生態学にもたらす可能性

T18 1+1 ≠ 2 メタ個体群アプローチが解き明かす生態

現象

T30 里地里山域に残存する半自然草地の多様性とその現状

W06 次世代 DNA シーケンサーの生態学へのインパクト
「学術情報として」

(文責：堀良通)

5. 保全生態学研究編集委員会 (刊行協議会)

日時 2009年3月17日(火) 11:30～13:30

場所 岩手県立大学 委員会室1 (2F 202)

出席者：湯本貴和(委員長)、角野康郎(次期編集委員長)、西廣淳(幹事)、石濱史子、角谷拓、河口洋一、倉本宣、小池文人、中越信和、藤井伸二、松田裕之、山本智子、遊磨美由紀(編集事務)、天野貴子(土倉事務所)

報告事項

・投稿、校閲状況

2008年1月-12月の投稿状況

2008年12月末日現在の投稿状況

	原著	総説	実践報告	保全情報	意見	合計
投稿総数	29	3	6	5	0	43
受理	15	0	3	2	0	20
却下	5	1	0	3	0	9
審査中	9	2	3	0	0	14

2008年：投稿総数43編、受理20編、却下・取り下げ9編、校閲中・改訂中14編

審議事項など

・表紙のカラー化について

・雑誌の冊数を増やすかどうかについて

(文責：湯本貴和)

6. 自然保護専門委員会

日時：2009年3月17日(火) 11:30～16:00

場所：岩手県立大学 共通講義棟 J会場(2F 208教室)

出席者：立川賢一(委員長)、加藤真(副委員長)、佐藤謙、紺野康夫、竹原明秀、鈴木孝男、川上和人、和田直也、井田秀行、安溪遊地、大田直友、逸見泰久、鈴木信彦、増沢武弘、竹門康弘、久保田康裕、陶山佳久、横畑泰志、竹中千里、村上興正

議事次第

[審議事項]

1. 関東地区選出委員・川上和人会員(任期2010年3月の総会まで)の紹介と承認。
2. 次期委員候補者も役員選挙権者に加えることにし、役員選挙規定を改訂した。
3. 2008年度活動費の収支報告と2009年度活動費予算について検討し、了承された。
4. 長野県根子岳大規模風力発電事業計画に対する中部地区会の対応について、井田委員から経過報告があった。国立公園内に風力発電施設を作ることの重大

性を考慮し、イヌワシや生物多様性に影響の大きい本風力発電事業計画の中止を求める要望書(案)を作成することにした。

5. 3000 m級の山岳地域の高山植生等にシカ害の強い影響がでていることをかんがみ今後の対策を検討することにした。
6. 来年度のフォーラムで、外来種問題などの開催を検討することにした。
7. 他の学会の「自然保護委員会」との情報交換を促進するために委員の所属する学会情報を集約することにした。
8. 専門別委員(エコツアーリズム)を2010年に設置し、委員を選定することにした。

[報告事項]

1. 2008年度活動報告が報告された(詳細は別記)。
2. 2008年度提出の要望書(新石垣空港)のフォローアップに関して逸見委員から報告があった。
3. アフターケア委員会報告で、1)上関と細見谷の現状に関して安溪委員から、2)尖閣諸島(野生化ヤギ問題)に関して横畑委員から報告があった。3月21日にフォーラムで詳細を報告する。
4. 外来種問題検討作業部会の議事内容について村上作業部会長から報告があった(作業部会報告を参照のこと)。
5. 天然林伐採問題検討作業部会の活動に関して佐藤作業部会長から、「国有林野の管理運営に関する基本計画(案)」に対する意見公募を作成したことの報告があった。
6. 生態系管理専門委員会における本委員会と関連する議事内容について竹門委員から報告された(生態系管理専門委員会報告を参照のこと)。
7. 村上委員から淀川問題検討委員会に関する現状報告があった。委員会が問題にしていた通りイタセンパラが絶滅し、アユモドキが激減するなど現状が明らかとなった。
8. 都市計画道路の見直しが検討されており、自然環境破壊につながる恐れがあるので、情報収集することにした。
9. 沖縄県西表島の舟浮地区一帯が大手資本に買い占められており、将来の観光開発が懸念されているので、状況把握に努めることにした。

[活動記録]

－2008年の記録－

- 2月6日：第14期第1回常任委員会に、立川委員長が出席し、自然保護専門委員会の活動報告を行った。
- 2月7日：東京で、福岡大会における委員会運営等に関して電話連絡を含む三役会議を行った。
- 2月15日：民主党・生物多様性基本法(案)に対する意見公募に応募し、本委員会が中心となってまとめた意見書を立川委員長名で提出した(その後、生物多様性基本法は、6月6日に公布・施行となった)。
- 6月14日：第14期第2回常任委員会に、立川委員長が

出席し、自然保護専門委員会の活動報告を行った。

- 6月30日：「上関原子力発電所設計計画に係る希少鳥類への影響評価に関する要望書」を作成し、立川委員長名で、環境大臣、経済産業大臣、文部科学省・文化庁長官、山口県知事、上関町長、中国電力株式会社・社長に提出した。
- 9月12日：「新石垣空港建設工事の中断と再度の環境影響評価を求める要望書」を作成し、立川委員長名で、国土交通大臣、沖縄県知事、環境大臣に提出した。
- 9月17日：上関アフターケア委員会（安溪委員他）は山口県庁に長島周辺海域におけるカンムリウミスズメ生息状況を説明。
- 9月29日：「絶滅のおそれのある動植物種の生息域外保全に関する基本方針（平成19年度版）」に対する意見書を自然保護専門委員会名で作成し、事務局を通じ、自然環境研究センター経由で環境省自然環境局野生生物課に提出した。
- 10月13日：公開講演会「やまぐちの天然記念物一鳥とともに生きる（山口）」に活動費の助成によりアフターケア委員会（飯田委員）を派遣した。
- 10月27-31日：外来哺乳類シンポジウム「侵略的外来種の防除戦略-生物多様性の保全を目指して-（沖縄産業支援センター）」を利用して、外来種問題検討作業部会編集会議を開催し、編集方針の変更を検討した。
- 11月29日：第14期第3回常任委員会に、立川委員長が出席し、自然保護専門委員会の活動報告を行った。
- 12月3日：「国有林野の管理経営に関する基本計画（案）」に対する意見公募に応募し、本委員会が中心になってまとめた意見書を立川委員長名で農林水産大臣に提出した。
- 12月25日：「沖縄県営林道環境調査報告書に関する要望書」を作成し、立川委員長名で沖縄県知事に提出した。
- 2009年の記録と活動予定 -
- 3月11日：上関アフターケア委員会（安溪委員）が中国電力本社を訪問し、カンムリウミスズメ等の保護を要望した。
- 3月17-21日：盛岡大会において、アフターケア委員会（上関、細見谷、尖閣諸島）の活動報告をポスター展示した。
- 3月21日：本委員会のフォーラム「宇宙から見た尖閣諸島魚釣島の野生化ヤギによる生態系変化」を開催予定。

（文責：立川賢一）

7. 外来種検討作業部会

日時：2009年3月17日9-11時

場所：岩手県立大共同講義棟202号室

出席者：村上・横畑・池田・岩崎・江口・桐谷・斉藤・立川・富山・中井・森本・常田（オブザーバー）

報告事項

国際シンポジウム「侵略的外来種の防除戦略」生物多様性の保全を目指して

外来哺乳類に関する国際学会が、日本生態学会の後援のもとに2008年10月28日から30日に池田さんを中心に日本、イギリス、ニュージーランドの共同で開催された。参加者数は約200名、費用は約900万円であった。海外からの参加者からも好評でジャワマングースなど日本の侵略的外来哺乳類の防除は国際的にも評価されるレベルになったことが判った。ただ体系的な取り組みやマスタープラン作りで海外の事例は参考となるが多かった。来年2月にNZで同様のシンポジウムが開催される。

議題

1. 委員として小笠原の外来種対策で取り組んでおられる可知さんに相談する。
2. 来年度大会でのシンポジウム企画—生物多様性条約会議COP10をにらんで
外来生物法が2005年に策定され5年後の見直し作業が行われる。これに向けて日本における外来種対策で取り組まれている事例の中から、適切なものを選び、フォーラムを外来種検討作業部会として開催することを自然保護専門委員会に提案する。また、環境省への要望書提出原案は今年12月を目標として取り組む。このためにフォーラム実行委員会を夏に開催して原案を作成し、これを部会で検討の上決定する。
3. 外来生物ハンドブックについて
2007年12月の編集会議を踏まえて外来生物ハンドブックの項目に関してたたき台が提出され、これを昨年度の部会で論議した結果を踏まえて修正を行った。
外来生物法に基づく防除が全国的に行われつつある現状や各種外来種凶鑑が出版された状況を踏まえて、本のタイトルなど重要なことを変更した。
 - 1) 本のタイトルを「外来種対策手引き書」に変更する。
 - 2) 本の内容を外来種対策の防除への取り組みの手引き書になるようにする。
 - 3) 国外外来種を主な対象として外来生物法の有効性と問題点が判るようにする。
 - 4) 意図的導入と非意図的導入に大別し、侵入経路ないし手段別の対策を記述する。
 - 5) 種別事例では主に対策が実施されている種や地域事例にするが、具体的で成果がある程度見えたものを取り上げることとする。
 - 6) 国内外来種など外来生物法対象外の問題は今後の課題として一括して扱う。

（文責：村上興正）

8. 将来計画専門委員会

議事

1. 総合地球環境科学研究所および京都大学生態学研究センターの現状と将来構想について
総合地球環境学研究所が学位授与機構の評価を受けた。評価は4であった。2011年から第2期が始まるために、組織が改組される可能性がある。生態研センターからは新しいプロジェクトの提案はなかった。

2009年度は、「日本列島における人間—自然相互関係の歴史的・文化的検討」(4年目)、「病原生物と人間の相互作用環」(3年目)、「人間活動下の生態系ネットワークの崩壊と再生」(2年目)の各プロジェクトが継続中である。国立大学フィールド科学センターネットワークのハブの機能を地球研が担うべく平成21年度概算要求は認められなかった。

生態学研究センターでは、12名の教員のうち3名が入れ替わった。センターと京大フィールド科学教育研究センターとの合併構想を見直し、双方独自に共同利用・共同研究拠点申請を行うこととなった。また、「公募共同研究」制度を検討中である。2010年度に終了する地球研プロジェクトの後継プロジェクトの申請は見送られた。今後の連携関係を強化するための企画委員会を設置し検討中である。拠点申請が認められたら、生態学会から運営委員を推薦してもらう方向で調整中である。

2. 学術会議の動向について

・生態科学分科会報告(第20期・21期)

「日本の展望—学術からの提言」をとりまとめる「日本の展望委員会」が設立された。これは、2011年度からの「第4期科学技術基本計画」へ反映させることがねらいである。21期の委員長に松本忠夫氏、副委員長に樋口広芳氏を選出した後、加藤真氏と向井宏氏を幹事として委員長が指名した。20期から21期への申し渡し事項には、フィールド研究拠点の充実、学協会との連携、生態科学を修めた学生たちの就職支援も含まれる。日本学術会議において、文部科学省の中央教育審議会より「学士課程教育の構築に向けての検討依頼をうけて「大学教育の分野別質保証の在り方に関する事項検討委員会」が設立されたので、生態科学分野においてもその関係の検討を行う。国立大学法人における全国共同利用研究所の在り方がフィールド科学の振興との関係で問題となっている。文部科学省は、各大学に対して全国共同利用研究所の在り方に関して来年の2月までに、新たな方針を立てることを求めているので、日本学術会議および各学協会においても、全国共同利用研究所をかかえている各大学の姿勢を注視する必要がある。高等学校および大学前期教育における生態・自然史科学の振興・普及に関しては、全国民の科学的素養を高めるという観点からの提言を出す方向で、第21期も引き続き活動を行うこととした。中・高等教育における生態・進化教育が学習指導要領に取り入れられ、平成23年度から改善される見込みがあるとの報告があった。

・応用生物学委員会報告

10～20年程度の中・長期的な学術の展望と課題として、標本等の収集・管理に対する支援体制がないため貴重な標本をやむなく手放さざるを得ない等、自然史・生態科学の現状の研究環境は概して劣悪であり、ポスト自体が著しく不足しており人材養成の場や機会が限られていること、その改善には、自然系博物館などの施設が大学との密接な連携のもとに研究および人材養成の役割を担うことができるようにするための環

境整備がのぞまれることなどが盛り込まれている。発展途上国の多くは生物多様性の情報基盤整備の力をもたない。自然史・生態科学はこれまでも研究フィールドを海外にもとめてきたが、アジア地域、さらには世界的スケールでの生物多様性の状況記録(インベントリー)、観測(モニタリング)、科学的総合評価などに積極的に寄与することが求められている。生物多様性条約のCOP10が日本で開催される2010年の国際生物多様性年を前に、この分野の総力を結集した科学的な「生物多様性総合評価」が求められているが、日本の自然史・生態科学が国際社会においてリーダーシップを発揮する機会として重視したい。また、気候変動が生態系に及ぼす影響の解明・予測およびその適応策の研究のためのネットワークの構築も目前の課題となっている。「自然共生社会」の構築のためには、社会の構成員が、人間と自然のいずれに対しても、深い理解と柔軟なまなざしをもつことが必要である。自然史・生態科学を初等教育から高等教育までの学校教育および社会教育のなかに十分に位置づけることは、そのために欠くべからざることである。そのような学習においては、野外での学習や実物に触れる体験が必須である。この分野の研究者が、基礎科学的な研究成果をわかりやすく社会に伝達することに加え、さまざまなテーマで実施されるようになった自然環境の保全・再生の事業に専門家として参与することは、当該分野の対外活動として特に重要である。一方で、自然再生などの事業を仮説検証のための実験として計画し、観測(モニタリング)によって取得されたデータを分析・評価することは、生態系規模の実験の機会が乏しい生態科学にとって、きわめて貴重な研究の機会ともなる。また、4月の二部会において応用生物学委員会を統合生物学委員会に名称変更をする準備をすすめている。

3. 若手・女性研究者支援をめぐる問題について

学術分野における男女共同参画の取組みで中心的な役割を果たしている男女共同参画学協会連絡会の運営委員会が3ヶ月に一度東京で開催され、可知委員長が学会代表として参加している。他学会の動向を知る上でも有効である。男女共同参画学協会連絡会主催の第6回シンポジウムが、2008年10月7日(火)に京都大学・百周年時計台記念館で開催された。日本生態学会からは、奥田昇(将来計画専門委員)、可知直毅(将来計画専門委員長)、半場祐子(常任委員)、湯本貴和(将来計画専門委員)の4名が参加した。詳細な参加報告は生態学会ニュースレターNo.17(2009年1月)に掲載されている。2009年10月7日(水)に東京工業大学で開催予定の第7回男女共同参画シンポジウムにも引き続き学会として参加する。2008年8月15日に、国立女性会館にて男女共同参画学協会連絡会と国立女性会館が主催する「平成20年度女子中高生夏の学校」で「野鳥の森自然観察」を生態学会として実施した。講師は立正大学の川西基博会員で、実習参加者は延べ40名であった。2009年度も同様の実習を実施予定である。3月21日に、将来計画専門委員会と常任委員会の主催でフォーラム「若手のための学位取

得後の多様なキャリアパス支援」を開催する。東京大会 2010 でも若手支援に関するフォーラムを企画する。

4. 委員の任期と委員の追加について

現委員の任期は 2009 年 3 月までであるが、2011 年 3 月まで延長することを全国委員会に提案することとなった。また、現在オブザーバとして参加している半場祐子常任委員を、将来計画専門委員に加えることを全国委員会に提案することとなった。

5. 副委員長交代について

粕谷副委員長が学会の幹事長となったため、半場祐子委員を新副委員長として全国委員会に提案することとなった。

6. 法人化後の将来計画専門委員会の体制について

常任委員会が理事会として機能するようになると、学会の将来計画は理事会の仕事になると予想される。将来計画専門委員会は、より長期的視野に立ち、生態学の学術的発展や社会との関係、若手支援や男女共同参画など、生態学関連分野の将来計画を広く「調査・研究」し提言する委員会として再編する方向で検討をすすめることとなった。

7. 若手支援・男女共同参画推進専門委員会（仮称）の設立を、全国委員会に提案することとなった。

8. その他

本委員会での今後の検討課題の候補として、社会との連携・社会への広報、大学院教育、大学教育（特に教養教育）、国際共同研究対応、生態・環境士、国に対するロビー活動（モニタリング 1000 等の予算的担保等）などが提案された。

（文責：可知直毅）

9. 生態教育専門委員会

1. 次期学習指導要領に関する意見交換

・2008 年 12 月 22 日に高等学校の次期学習指導要領が発表された。生態、進化は、「生物基礎」（2 単位）、「生物」（4 単位）の両方に含まれ、特に、環境や生物保全に関する内容が増えている。文部科学省では、現在、次期学習指導要領解説が編纂中とのこと。

・これを受けて、盛岡大会では 3 月 19 日（木）に当委員会が主催して「生態学教育フォーラム」を開催予定。話題提供者は以下のとおり。

嶋田委員長、早崎博之（東京都江北高等学校）、中井咲織（立命館宇治中学校・高等学校）、藤井恒（代々木ゼミナール・理数研セミナー講師）

2. 国際生物学オリンピック・つくば大会（IBO2009）の委員委嘱

・嶋田委員長は IBO2009 組織委員会の理論問題作成委員会・副委員長に就任。

・理論問題作成委員会から各学会に若干名の作問者を選挙する依頼が届き、当委員会のメンバー 2 名を含む 4 名の学会員（氏名は非公開）にお願いした。

3. 日本生態学会・東京大会（2010 年 3 月）で開催予定の「高校生のポスター発表会」に向けての準備

・これに先立ち、委員の交代（木村和喜夫→中井咲織 [立命館宇治中学校・高等学校]）と 1 名の増員（浅見崇

比呂 [信州大・理]）が常任委員会で認められた。

・東京大会では「高校生のポスター発表会」を試行する。効率よく準備・運営するために、6 名の委員（嶋田、山村、久保田、広瀬、中井、浅見）が大会企画委員会・ポスター部会委員を兼任することになり（試行のため 1 年任期）、常任委員会で認められた。

4. 日本生物教育会・宮崎大会への委員派遣

・日本生物教育会・宮崎大会（2008 年 8 月 5～6 日、ウェルシティ宮崎）に、嶋田、広瀬、西脇の 3 名の委員を派遣し、高校生物教育界と交流を深めた。

・一般講演で、嶋田が当委員会で編纂を開始した「生態学実習書」の計画（電子ファイルで編集を進める）を講演した。

5. 「生態学実習書」の編纂について

・H21 年度には 6～7 月 or 9～10 月頃の週末を利用して当委員会の合宿を行い、「生態学実習書」のテーマ選定と内容の検討を進める予定。

（文責：嶋田正和）

10. 生態系管理専門委員会

出席者：竹門康弘、松田裕之、椿宣高、津田智、向井宏、國井秀伸、角野康郎、中越信和、加藤真、神田房行、嶋田正和、西廣淳

議題

1. 自然再生ハンドブックの編集・出版スケジュール

原稿は概ね揃い、事例紹介の章の査読と修正はほぼ完了している。未提出章の原稿締め切りは 3 月末とするとともに、提出原稿の修正を 4 月末まで受け付け、2009 年秋までの発行を目指すこととした。

2. 自然再生ハンドブックにもとづく講習会の開催

第一回自然再生講習会の方針について以下の通り議論した。

自然再生の促進を目的とし、自然再生事業に関心のある市民、自然再生協議会を設立あるいは設立準備している行政関係者、コンサルタント等企業関係者を主要な対象とする。第一回講習会では、比較的小規模に実現できる自然再生の成功事例を紹介することを重視する。

第一回 自然再生講習会

「あなたにもできる自然再生：生態学の視点から」（仮）

オーガナイザー：松田裕之

主催：日本生態学会

後援（予定）：環境省、国土交通省、農林水産省、応用生態工学会、景観生態学会、緑化工学会

・日程は 8 月 1 日か 8 日を候補として調整する。

・場所は東京大学農学部を予定する。参加予定者 100～200 人程度。参加費 2,000 円

・講義で使った資料は、教材として別の機会にも活用できるように作成する。

・受講証明書を発行する。参加者にはアンケートを提出してもらう。

3. 今後の活動計画

・平成 21 年度からの活動として、自然再生のケーススタディーの検討の一環としてヒアリング（現地視察）

をし、必要に応じてアドバイスする活動を行なう。ヒアリングの対象とする事例は委員が提案する。まずは静岡県の麻機遊水地（巴川流域）を対象とする。

- ・「自然再生事業指導員（仮称）」の認定について環境省に働きかけるとともに、実施にあたっては協力する。また将来、生態系管理士のような資格認定を行うことについても議論した。
 - ・COP10に向けて生態学会の生物多様性保全と関わる活動を国際的にアピールする印刷物を発行するべきであるとの意見があり、委員会としては、生態学会（執行部）から活動紹介の要望があれば数ページの英文資料を提供することとした。
4. その他
- ・現在の委員は原則として2010年3月まで継続する（2期）、その後については委員に継続の意思を打診し、交代を希望する場合は推薦を受け付けることとした。

11. 大規模長期生態学専門委員会

日 時：2009年3月17日 11:30 - 13:30

場 所：岩手県立大学（第56回日本生態学会）

出席者：日浦勉（委員長）、甲山隆司、三枝信子、正木隆、大手信人、仲間雅裕、柴田英昭、鈴木準一郎、中村誠宏、石原正恵（オブザーバー）、小川安紀子（オブザーバー）、矢原徹一（オブザーバー）

議題

1. Ecological Research データペーパー

ER データペーパーとは生態学的に重要なデータとメタデータからなるもので、生態学の文献として引用可能でかつ著者の業績ともなる。投稿されたデータペーパーは一定の審査を経て掲載の可否を判断される。

ER に新たにデータペーパー枠を設置するための準備を現在行っている。

- ・投稿規定および審査規定を作成中。年末までに案を完成予定。
- ・信頼できるポータルサーバーにデータを置かねばならないことを投稿規定に入れる。
- ・電子投稿を可能にする条件をER出版社と交渉してほしい。
- ・ER編集委員会にデータペーパー枠担当の編集委員を一人増やして欲しい。

2. 各種ネットワーク報告

- ・JaLTER 今年度も数カ所サイトが増え、現在46サイト いくつかのファンドをもとに活動中。今春からデータベースを公開予定。
- ・AsiaFlux 2008年3月に韓国にオフィス設置 JapanFlux 事務局は北海道大学・平野氏 JaLTER との連携のためのシンポを2008年10月開催
- ・GLP 日本学術会議国内シンポ今年10月3日開催
- ・Census of Marine Life 2010年秋にグランドフィナーレシンポ開催
- ・モニタリング1000 JaLTERサイトに登録されている森林分野のデータをJaLTERデータベースに登録することを検討中。
- ・COP10にむけて生態系・生物多様性研究ネットワー

ク化第1回シンポ5月開催予定

（文責：日浦勉）

12. 野外安全管理委員会

1. 安全についての教育用として使えるプレゼンテーションファイルを作成している。マニュアル案への意見をふまえて修正作業をしている。
 2. 大会期間中の19日に委員会を行なう予定である。
 3. 委員長を鈴木準一郎氏（首都大学）に交代する。
- （文責：粕谷英一）

13. 国際対応委員会

国際対応委員会は、EAFES, INTECOL などに関する仕事を主として行ってきたが、特に委員会を維持する必要性が低いと考えられ、以下のように提案し全国委員会で承認された。

- 1) 国際対応委員会は経常的な仕事が多くなく、対応も幹部対応用件が多いため廃止する。
- 2) EAFES, INTECOLなどは常任委員に対応者を指名することで対応する。
- 3) EAFES大会準備など、必要な場合には臨時の対応グループ（委員会、ワーキンググループなど）を設置する。また、次回のEAFES開催時には、大会実行委員会の中で準備などを行うことになっている。

（文責：中静透）

14. 学術会議

生態科学分科会が下記のように開催された。

（第20期・第8回会議）2008年9月9日（火）

- (1) 「日本の展望—学術からの提言」をとりまとめる「日本の展望委員会」が設立された。これは、2011年度からの「第4期科学技術基本計画」へ反映させることがねらいである。
- (2) 第21期への申し渡し事項の検討
 - * 日本学術会議において、文部科学省の中央教育審議会より「学士課程教育の構築に向けて」の検討依頼をうけて「大学教育の分野別質保証の在り方」に関係する事項検討委員会が設立されたので、生態科学分野においてもその関係の検討を行うこととした。
 - * 国立大学法人における全国共同利用研究所の在り方が、フィールド科学の振興との関係で問題となっている。文部科学省は、各大学に対して全国共同利用研究所の在り方に関して来年の2月までに、新たな方針を立てることを求めてきているので、日本学術会議および各学協会においても（科学者コミュニティの立場から）、全国共同利用研究所をかかえている各大学の姿勢を注視する必要がある。そこで、生態科学分科会としては、京大生態学研究センターをはじめ、全国のフィールド研究センター、演習林、臨界実験所などの動向をにらんで新たな提案をしていく必要がある。また、大学間のネットワーク構想を申請することもできるので、もしあれば、早急に検討する必要がある。
 - * 高等学校および大学前期教育における生態・自然史科学の振興・普及に関しては、全国国民の科学的素養を高

めるという観点からの提言を出す方向で、第21期も引き続き活動を行うこととした。

(第21期・第1回会議) 2009年1月7日(水)

- (1) 第21期の委員として新たに任命された以下の人の確認がなされた。加藤真、嶋田正和、高村典子、辻和希、寺島一郎、長谷川真理子、樋口広芳、松本忠夫、三浦慎吾、向井宏、鷲谷いづみ、矢原徹一、巖佐庸、岩熊敏夫、甲山隆司、中静透(順不同)また、委員長に松本忠夫氏、副委員長に樋口広芳氏を選出した後、加藤真氏と向井宏氏を幹事として委員長が指名した。
- (2) 「日本の展望—学術からの提言」のとりまとめについての手順を鷲谷いづみ学術会議会員から説明があり、分科会から盛り込みたい内容については積極的に意見を挙げて欲しいという依頼があった。親委員会である応用生物学委員会で、それらの意見がとりまとめられ、「日本の展望委員会」に提案される(別紙参考文書あり)。
- (3) 生物多様性条約 COP10 に向けて、学術会議ならではの取り組みが何かできるかについて、議論が交わされた。国際シンポジウムを行なう計画があるとの報告があった。また生態学会を中心にして、さまざまな学会や NGO を巻き込んだ動きが COP10 をめざして胎動しつつあるという報告があった。本分科会でも他の団体のシンポジウムとの連携の可能性について議論された。同時に、生物多様性の概念が一般市民にはあまり理解されていない状況を打開する必要があるとの意見が提出された。また、多様性の生態系機能について、研究・教育両方の視点から検討を深める必要がある。
- (4) 中・高等教育における生態・進化教育が、学習指導要領の中で平成23年度から改善される見込みがある、との報告があった。また、小学校の1・2年で理系の先生が教育に携わっていない現状に大きな問題点があり、初等教育における自然教育の充実を訴えていかななくてはいけないという意見がでた。中・高等教育自然科学教育に関する分科会がたち切れになったことを受けて、初等教育をも含めた新たな自然科学教育を考える分科会を学術会議の中に作る必要があり、そのように提言していくということになった。
- (5) 大学のフィールド研究拠点は、生態科学の教育・研究に必須のものであり、また生物多様性のモニタリングを担うことができる唯一の機関でもあるという認識に立ち、その充実の必要性を訴える答申を提出することが21期のこの分科会の必要課題であるとの意見がでた。

(文責：松本忠夫)

14. 法人化準備について

活動報告

- ・法人化WGの開催：7/25(東京)、その後11月と2月にメールで。

- ・7/29学術会議主催「新法人法への対応シンポジウム—学協会の公益性の確立に向けて—」に石川が参加
- ・模範定款が公開されたので、これに沿って定款の整備を進めている。
- ・定款の整備と同時進行で、会則・細則・規定の改訂案を作成中。
- ・定款。諸規則については、4月にWGを開催してさらに具体化する。

【さらなる課題】

- ・今後、法人会計、法人としての意思決定プロセスへの順化・移行が必要。
- ・従来の学会活動を公益事業と収益事業に分類し、また新規の公益事業の検討が必要。
- ・全国委員の増員(代議員として)を検討する。
- ・理事長(=学会長)、理事会、理事、代議員、会員という組織立てになることを、会員にわかりやすく説明していかなくてはならない。

1. 法人化のスケジュールについて

当初予定より1年先送りとし、2010年3月東京大会での発足をめざす。

理由：7/29学術会議シンポジウムでの説明で、「法人化を急ぐメリットはほとんどない」「かかるコストへの対応方法を十分に検討してから」が主要な論調であった。本学会よりも大きな諸学会の動向を見据えるべきである。

延期について、学会長から会員にメッセージを書いてもらい、学会ホームページに掲載された。

2. 7/29新法人法への対応シンポジウムについて

内容：新非営利法人制度における税制について(企業税制研究所代表理事・朝長英樹氏)、一般社団・財団法人制度について(法務省民事局検事・澁谷亮氏)、公益社団・財団法人制度について(公益認定等委員会事務局参事官補佐・畠山悟氏)、質疑応答(石川メモ)

説明をしてくださった3人の演者に共通する論調は、「一般社団法人、公益法人になる具体的なメリットは、内部ガバナンスの強化に尽きる。逆に、かかる労力、リスクは大きいので、性急に法人化をめざすのは得策でなく、現状で任意団体である場合は特に慎重であるべき」です。

2.1. 一般社団法人について

任意団体が一般社団法人となる際に、任意団体が所有する資産に関して、税の徴収は発生しない。一般社団法人を設立するのは、手続き上難しくないが、任意団体である場合と比べて具体的なメリットは少ない。

2.2. 公益法人について

手続きは諸処非常にきびしい。公益事業認定については、ガイドライン、チェックポイントは絶対的ではなく、あくまでも例示。具体的なことは、すべて公益等認定委員会と各都道府県の所管第三者委員会で個別に協議することになり、その際に公益性を具体的な根拠を持って説明することになる。

公益法人に認定される具体的なメリットは、寄付者の納税率が低い、だけ。法人としての具体的なメリットはあまりない。逆に、認定は毎年受けなくてはならないので、その作業のための人件費の増大、認定取り消しになった際には経費の全てが課税対象になる（つまり、一般法人と同じ扱いになるということ）など、リスクは大きい。

模範定款は、公益等認定委員会ホームページの第38回資料3にある。

定款において事業範囲が複数都道府県にまたがることを明記すると、認定の申請先は「国」となる。

2.3. 税制について

一般社団法人でも公益法人でも、収益事業における所得に対して同じ比率で法人税がかかる。公益事業は非課税。むしろ、公益事業と収益事業にわけること、会計処理が増大し、また公益事業が赤字でも収益事業が黒字なら課税され、全体として不利益になる場合もある。

一般法人、任意団体、一般社団法人、公益法人いずれにおいても、所得に対する税率は同じで、今回の法改正により増税されている。

任意団体の場合、法人化するかどうかにかかわらず、税の専門家に相談するのが得策。いままで納税していなかったところも、今後は税務署の査察が入るようになる。さほど黒字をあげていないのであれば、追徴課税などをあまり心配することはない。

(文責：石川真一)

15. COP10 に向けての日本生態学会の取り組み

生物多様性条約第10回締結国会議（COP10）が2010年10月に名古屋で開催されます。2010年は「生物多様性損失を有意に減らす」という「2010年目標」の評価年に位置づけられています。この2010年に向けて、国内外でさまざまな取り組みが開始されています。日本生態学会では、矢原（現会長）、中静（次期会長）、鷲谷（前会長）らが、互いに連絡をとりながら、以下の取り組みに関与しています。

- 1) GEO（地球観測政府間ワーキンググループ）の下に、GEO BON（GEO Biodiversity Observation Network）が2008年に組織され、世界各地で進められている生態系・生物多様性モニタリングを統合する計画が始動しました。DIVERSITASとNASAが中心になってこの計画を推進しています。矢原がGEO BON概念文書起草にかかわり、DIVERSITAS日本委員会（中静委員長）と連絡をとりながら、GEO BON日本委員会（JBON）の組織化を進めています。
- 2) 環境省ではCOP10にむけての円卓会議を開催し、関係各省庁、研究者、NGO間の連絡調整を行っています。日本生態学会からは矢原・中静・鷲谷（日本学術会議）・吉田（IUCN日本委員会）が参加しています。
- 3) 環境省ではCOP10にむけて生物多様性総合評価を実施しており、生物多様性総合評価検討委員会は日本生態学会会員で構成されています。本大会のシンポジウム（S15）で中間報告が行われます。

- 4) 環境省では、生物多様性条約事務局スタッフを含む専門家を招聘し、平成20年12月に専門家会合を開催しました。日本生態学会からは中静が生物多様性総合評価の進行状況を、矢原が植物RDBにおける絶滅リスク評価の成果を報告しました。
- 5) 環境省生物多様性センターでは平成20年度にESABII（East and Southeast Asia Biodiversity Inventory Initiative）を開始しました。平成21年度にはGBMI（Global Biodiversity Monitoring Initiative）を開始します。環境省担当者と矢原・中静で打ち合わせを持ち、これらのイニシアティブをGEO BON日本委員会（JBON）の取り組みと連携して進める方向で、連絡調整をはかっています。

日本生態学会ではまた、12月18日に関連学会に呼びかけて、COP10プレコンファレンス第一回準備委員会を開催しました。今後は、COP10プレコンファレンス第二回準備委員会を開催して学会間の連絡調整をはかるとともに、GEO BON日本委員会（JBON）第一回コンファレンスを開催して、研究者・研究機関のネットワーク化を推進します。GEO BON日本委員会（JBON）第一回コンファレンスに関しては、環境省との打ち合わせにもとづき、以下のように実施する予定です。

- 1) 2009年5月8日（金）～10日（日）にGEO BON日本委員会（JBON）主催の会議を行う。会議の名称は、ワークショップ「生態系・生物多様性研究のネットワーク化」とする。
- 2) 会場は東京大学駒場キャンパス18号館1階ホール（全体会議）、および5号館（分科会）。
- 3) 日本生態学会が会議を共催し、中心になって準備を進める。GEO BON日本委員会（JBON）名で趣意書を作成し、以下の機関・団体に共催の依頼を行う。
環境省、文部科学省、農林水産省、国土交通省、経済産業省、JAXA、JAMSTEC
関連するグローバルCOEプログラム
- 4) 会議の初日には、矢原・中静による基調報告に続いて、以下の課題をとりあげ、生態系・生物多様性観測ネットワーク化のニーズ、とりわけGEO BONを日本およびアジアの観測研究にどう生かすかに関して、議論を行う。講演者には事前に会議の趣旨をよく説明し、分科会への問題提起・提言をふくむ基調報告的な講演をお願いする。会議後に懇親会を開催する。
 - 森林の変化の評価・データベース化
 - 水田の変化の評価・データベース化
 - 湖沼の変化の評価・データベース化
 - 河川の変化の評価・データベース化（自然再生事業をふくむ）
 - 海洋生態系の変化の評価・データベース化
 - 社会系の変化の評価・データベース化
 - 種・遺伝子レベルの変化の評価・データベース化
- 5) 2日目には、5つの分科会（森林、農地および草地、陸水、海洋、種・遺伝子）に分れ、日本およびアジアの観測研究から得られたデータをネットワーク化

するための課題、および行動計画について議論する。

- 6) 3日目には、5つの分科会からの報告を受けたあと、以下の課題について報告を提案し、全体での議論のあと、行動計画を採択して閉会する。
- GEO BONをサポートするデータベースセンターの構築
 - 生物多様性モニタリングデータの統合（河川水辺の国勢調査、農水省の調査、環境賞の調査、研究者によるデータベースなどの統合化）
 - アジアネットワークの強化（DIEWPA, ESABII, APNなどの連携強化）
- 7) 行動計画として、日本を含むアジアの生態系・生物多様性のメタデータに関する英文の単行本出版を提案する。12月のCOP10プレコンファレンス準備会合までに原稿を準備し、3月22-23日のCOP10プレコンファレンスで公表する。

COP10にむけての今後の日程は以下のとおりです。

- 2009年5月8-10日：JBON 第一回コンファレンス
東京大学駒場キャンパス
- 2009年7月18-20日：JBON 第二回シンポジウム(予定)
- 2009年7-9月：環境省専門家会合

- 2009年10月13-16日：DIVERSITAS Open Science Conference 2 (Cape Town)。この会議中に開催されるDIVERSITAS科学委員会で、GBO3 (Global Biodiversity Outlook 3)、ポスト2010年目標などについて議論される。OSC2会期後に、GEO BONに関する会議が開かれる予定。
- 2009年10-12月：環境省アジア会合
- 2009年12月第一週：COP10プレコンファレンス準備のための国際会合を日本で開催。
- 2009年1-3月：環境省専門家会合、GEOSS-APシンポジウム（バリ、インドネシア）。
- 2010年3月22-26日：COP10プレコンファレンスとDIVERSITAS科学委員会を日本で開催。GBO3、ポスト2010年目標などの最終案を検討。
- 2010年5月13-21日：CBD SBSTTA（ナイロビ）。GBO3、ポスト2010年目標などを提案。
- 2010年5月22日（生物多様性の日）：GBO3発表
- 2010年7-9月：環境省専門家会合
- 2010年9月：日本学術会議国際シンポジウム
- 2010年10月18-20日：CBD COP10（名古屋）
(文責：矢原徹一)

B. 承認事項

1. 2008 年度決算

一般会計

収 入 の 部			支 出 の 部		
	08 予算	08 決算		08 予算	08 決算
会費			会誌発行費		
一般会員	30,500,000	31,077,600	ER	19,600,000	19,712,655
学生会員	6,100,000	6,481,200	生態誌	4,200,000	3,837,957
団体会員	2,800,000	2,554,000	保全誌	1,600,000	2,466,712
賛助会員	20,000	20,000	ニュースレター	1,200,000	831,599
外国会員	270,000	339,200	和文誌発送費		428,960
和文誌購読	750,000	670,200	編集費	100,000	74,605
小 計	40,440,000	41,142,200	小 計	26,700,000	27,352,488
ER 売上還元金	750,000	1,022,653	会議費	150,000	131,100
Back No. 売り上げ	40,000	61,900	旅費・交通費	2,000,000	2,442,370
科研費・刊行助成金	8,500,000	6,900,000	人件費	13,000,000	13,583,839
出版印税	400,000	801,481	地区会へ還元金	2,000,000	1,943,302
利子収入	40,000	57,420	大会支出	18,000,000	18,997,905
広告代	180,000	260,000	公開講演会	1,200,000	1,201,624
著作権使用料	200,000	164,487	INTECOL 会費	430,000	370,480
ER 超過ページ代	300,000	197,500	事務費		
大会収入	18,000,000	19,364,293	通信費	900,000	804,969
講習会費	200,000	0	消耗品費	170,000	132,903
前年度繰越金	28,745,940	28,745,940	雑費	250,000	421,224
			銀行手数料	130,000	105,870
			レンタル料	420,000	418,000
			事務所賃貸料・電気代	1,680,000	1,680,000
			会計監査（税理士）	378,000	378,000
			小 計	3,928,000	3,940,966
合 計	97,795,940	98,717,874	各種委員会費	1,530,000	521,132
単年度収入	69,050,000	69,971,934	名簿作成費	0	0
			選挙費	0	0
			EAFES 費用	100,000	0
			次年度繰越金	28,757,940	28,232,668
			合 計	97,795,940	98,717,874
			単年度支出	69,038,000	70,485,206

特別会計 I（宮地基金）

	08 予算	08 決算		08 予算	08 決算
前年度繰越金	4,099,545	4,099,545	宮地賞賞金	400,000	400,000
預金利息	0	6,307	次年度繰越金	3,699,545	3,705,852
合 計	4,099,545	4,105,852	合 計	4,099,545	4,105,852

大島基金

	08 予算	08 決算		08 予算	08 決算
前年度繰越金	10,011,929	10,011,929	大島賞賞金	200,000	200,000
預金利息	0	15,863	次年度繰越金	9,811,929	9,827,792
合 計	10,011,929	10,027,792	合 計	10,011,929	10,027,792

生態学琵琶湖賞基金

	08 予算	08 決算		08 予算	08 決算
寄付金		1,287,160	次年度繰越金		1,287,160
預金利息		0			
合計		1,287,160	合計		1,287,160

2. 第 58 回大会開催地

58 回大会は北海道地区会が担当し、2011 年 3 月に札幌にて行うことが承認された。

3. 第 59 回大会 (2012 年) 担当地区会

第 59 回大会は近畿地区会が担当することが承認された。

4. 名誉会員推薦について

田川日出夫氏及び阿部永氏が名誉会員に推薦され、総会にて承認された。

田川 日出夫

略歴

1933 (昭和 8) 年 7 月 16 日生

九州大学理学部、同大学院博士課程修了後、鹿児島大学教養部に赴任。同大教授、同教養部長を経て 96 - 2002 年、鹿児島県立短大学長。

96 年から屋久島環境文化財団の屋久島環境文化村センター、屋久島環境文化研修センター館長。

<生態学会役員履歴>

1977 - 1979 年 日本生態学会誌編集幹事

1979 - 1981 年 九州地区会長

1984 - 85 88 - 91 94 - 97 年 (計 5 期) 全国委員

2000 - 2001 年 会長

<推薦理由>

田川日出夫先生は日本生態学会設立期からの会員で、植生遷移、埋土種子などの研究において高い業績をあげられています。特に 1883 年の噴火で植生が消失したクラカタウ諸島において、噴火 100 年後の植生回復に関する学術調査隊を組織され、国際的に活躍されました。その成果は Plant Ecology 誌 (Tagawa et al. 1985 Vegetation and succession on the Krakatau Islands, Indonesia) などに発表され、国際的に高く評価されています。

日本生態学会においては IBP (International Biological Programme) の下での生物生産に関する国際研究プロジェクトの立案・推進に貢献されました。2000 - 01 年には会長を務められ、保全生態学の発展にともない会員が増え、社会との関わりが拡大した時期に、学会の運営に大きく貢献されました。また、「生態遷移研究法」(共立出版、1979)、「植物の生態」(共立出版、1982) などの出版を通じて、生態学の普及・発展に大きく貢献されました。

社会的には、屋久島の生態系保全に長年にわたって努力され、世界自然遺産指定の実現に大きく貢献されました。1996 年からは屋久島環境文化研修センター館長として、世界自然遺産指定後の屋久島での環境教育に余人をもって代えがたい貢献を続けられています。

以上のように田川先生は、研究業績、学会に対する貢献、生態学の啓蒙・普及、社会的貢献のいずれにおいても顕著な貢献を果たされており、日本生態学会の名誉会員として相応しいと考え、ここに推薦いたします。

阿部 永

生年月日 1933 年 5 月 27 日

1956 年 3 月 北海道大学農学部農業生物学科卒業

1961 年 3 月 北海道大学農学研究科博士課程修了 (農学博士)

1961 年 4 月 北海道大学農学部助手 (博物館)

1969 年 4 月 北海道大学農学部助教授 (応用動物学教室)

1992 年 4 月 北海道大学農学部教授 (応用動物学教室)

1997 年 3 月 北海道大学農学部 定年退職

<生態学会役員履歴>

1972 年 - 1982 年 日本生態学会誌編集委員

1980 年 - 1982 年 日本生態学会誌編集幹事

1984 - 85 90 - 93 年 96 - 97 年 全国委員

1992 年 - 1995 年 北海道地区会長

1997 年 日本生態学会札幌大会会長

<その他の学会・社会活動>

北海道エキノコックス症予防対策協議会委員、北海道自然環境保全審議会委員、北海道文化財保護審議会委員、北海道環境影響評価審議会委員、日本哺乳類学会会長、自然環境保全審議会専門委員 (国)、文化財保護審議会専門委員 (国)、日本応用動物昆虫学会北海道支部長、シマフクロウ保護増殖検討委員会 (座長) など

<推薦理由>

阿部永先生は日本生態学会草創期からの会員で、哺乳類の生物地理、群集、生活史などの研究において高い業績をあげられています。特にヒマラヤの齧歯類群集の多様性の分析は独創性が高く、種間の局地的な共存機構は温帯域と共通点が多く、熱帯域の高い多様性は局地群集間の不均一性によることを示した論文 (Mammalia 46(4): 477-503, 1982) は、群集生態学の先駆的な研究として高く評価されています。

日本生態学会においては、略歴に掲げたように多くの役員を務められました。特に学会誌編集幹事を務められているとき、査読結果に不満を持つ投稿者からの執拗な干渉に毅然として対応し、学会誌編集権の独立性を守られたことは特筆に値します。また、1993 年には記念出版物「生態学からみた北海道」(北海道大学図書刊行会) の編集に中心的な役割を果たされ、北海道の生態学の普及・発展に大きく貢献されました。

教育においては、北海道大学農学部応用動物学教室において、多くの研究者を育てられました。その卒業生は、現在、活発に研究を展開しており、日本生態学会におい

でも役員（河田雅圭、日野輝明、齊藤隆）を務めるなど、日本の生態学の発展に大きな貢献を果たしています。さらに阿部先生は、今回、大島賞を受賞する綿貫豊氏の大学院時代の指導を担当されました。

社会的な貢献に関しましては、略歴に記しましたように数多くの審議会委員、学会役員などを歴任されました。

以上のように阿部先生は、研究業績、学会に対する貢献、教育、生態学の啓蒙・普及、社会的貢献のいずれに

おいても顕著な貢献を果たされており、日本生態学会の名誉会員として相応しいと考え、ここに推薦いたします。

5. その他

第55回大会の総会で質問された、第54回大会において会員が他の会員同士の議論を妨害した疑いがあるという件については、調査の結果、事実がなかったとの報告が会長よりあり、了承された。

C. 審議事項

1. 2009年度予算案について

2009年度予算案が決議された。

収入の部			支出の部		
	08 決算	09 予算		08 決算	09 予算
会費			会誌発行費		
一般会員	31,077,600	31,000,000	ER	19,712,655	19,200,000
学生会員	6,481,200	7,000,000	生態誌	3,837,957	5,000,000
団体会員	2,554,000	2,500,000	保全誌	2,466,712	2,400,000
賛助会員	20,000	20,000	ニュースレター	831,599	1,200,000
外国会員	339,200	350,000	和文誌発送費	428,960	450,000
和文誌購読	670,200	650,000	編集費	74,605	100,000
小計	41,142,200	41,520,000	小計	27,352,488	28,350,000
ER 売上還元金	1,022,653	1,000,000	会議費	131,100	150,000
Back No. 売り上げ	61,900	40,000	旅費・交通費	2,442,370	2,200,000
科研費・刊行助成金	6,900,000	8,250,000	人件費	13,583,839	13,300,000
出版印税	801,481	480,000	地区会へ還元金	1,943,302	1,520,000
利子収入	57,420	50,000	大会支出	18,997,905	16,000,000
広告代	260,000	0	公開講演会	1,201,624	500,000
著作権使用料	164,487	160,000	INTECOL 会費	370,480	380,000
ER 超過ページ代	197,500	400,000	事務費		
大会収入	19,364,293	16,000,000	通信費	804,969	800,000
講習会費	0	200,000	消耗品費	132,903	300,000
前年度繰越金	28,745,940	28,232,668	雑費	421,224	300,000
			銀行手数料	105,870	130,000
			レンタル料	418,000	403,000
			事務所賃貸料・電気代	1,680,000	1,680,000
			会計監査（税理士）	378,000	378,000
			小計	3,940,966	3,991,000
			各種委員会費	521,132	1,000,000
			名簿作成費	0	0
			選挙費	0	400,000
			EAFES 費用	0	100,000
			次年度繰越金	28,232,668	28,441,668
合計	98,717,874	96,332,668	合計	98,717,874	96,332,668
単年度収入	69,971,934	67,900,000	単年度支出	70,567,331	67,989,000

特別会計 I (宮地基金)

収入の部			支出の部		
	08 決算	09 予算		08 決算	09 予算
前年度繰越金	4,099,545	3,705,852	宮地賞賞金	400,000	300,000
預金利息	6,307	0	次年度繰越金	3,705,852	3,405,852
合計	4,105,852	3,705,852	合計	4,105,852	3,705,852

大島基金

収入の部			支出の部		
	08 決算	09 予算		08 決算	09 予算
前年度繰越金	10,011,929	9,827,792	大島賞賞金	200,000	100,000
預金利息	15,863	0	次年度繰越金	9,827,792	9,727,792
合計	10,027,792	9,827,792	合計	10,027,792	9,827,792

生態学琵琶湖賞基金

収入の部			支出の部		
	08 決算	09 予算		08 決算	09 予算
前年度繰越金	0	1,287,160	旅費	0	200,000
寄付金	1,287,160	0	次年度繰越金	1,287,160	1,087,160
合計	1,287,160	1,287,160	合計	1,287,160	1,287,160

2. 会則改正について

以下の会則改正案が提案され決議された。

< 現行 >

第15条 幹事長、幹事、会計監事、および編集委員長は全国委員会の協議により、正会員の中から選び、会長が委嘱する。任期は3年とし重任してもよい。編集幹事は編集委員長をかねることができる。常任委員は会長の指名にもとづき、全国委員会の議を経て選出する。任期は2年とし重任してもよい。

< 改定案 >

第15条 幹事長および、編集幹事を除く幹事は全国委員会の協議により、正会員の中から選び、会長が委嘱する。任期は2年とし重任してもよい。編集幹事、会計監事、および編集委員長は全国委員会の協議により、正会員の中から選び、会長が委嘱する。任期は3年とし重任してもよい。編集幹事は編集委員長をかねることができる。常任委員は会長の指名にもとづき、全国委員会の議を経て選出する。任期は2年とし重任してもよい。

II. 第56回日本生態学会大会の記録

第56回日本生態学会大会 (JES56) は、岩手県立大学・盛岡市民文化ホール・アイーナを会場として2009年3月17日～3月21日に開催されました。

大会期間中に公開講演会1、シンポジウム24、フォーラム5、企画集会31、自由集会27、一般講演(口頭発表)178、一般講演(ポスター発表)1040、が行われました。参加者は2,003名でした。5日間の日程とポスター賞(日本生態学会公認表彰)受賞者は以下の通りです。

日 程

- 3月17日 各種委員会(大会企画委員会、日本生態学会誌刊行協議会、Ecological Research 刊行協議会、保全生態学刊行協議会、将来計画専門委員会、生態学教育専門委員会、外来種検討作業部会、自然保護専門委員会、生態系管理専門委員会、大規模長期生態学専門委員会)、全国委員会、自由集会
- 3月18日 シンポジウム、フォーラム、一般講演(口頭発表)、一般講演(ポスター発表)、企画集会
- 3月19日 シンポジウム、フォーラム、一般講演(ポ

スター発表)、企画集会

- 3月20日 公開講演会、各賞授賞式、受賞講演、総会、懇親会、自由集会
- 3月21日 一般講演(口頭発表)、フォーラム、企画集会
- 3月22日 エコカップ2009(親善フットサル大会)

ポスター賞受賞者

< 植物群落 >

優秀賞

- 平田晶子、上條隆志(筑波大・生命環境)、齊藤哲(森林総研)
維管束着生植物とホスト樹木の種間相互作用の構造と特異性
- 大山拓郎、齊藤時子(新潟大・農)、紙谷智彦(新潟大院・自然科学)
落葉広葉樹林における林冠構成種の違いが林床の光環境と植物種組成に及ぼす影響
- 齊藤瑛璃香(新大・農)、石田真也(新大・自然科学・学振DC)、高野瀬洋一郎(新大・超域研究機構)、紙谷智彦(新大院・自然科学)
河川域において植物種多様性のホットスポットが形成される条件—植物種多様性が高いワンドと低いワンド—
- 斎藤達也(北大・環境)、露崎史朗(北大・地球環境)
火山荒原上の植物分布に対する非在来カラマツと在来ダケカンバの樹冠効果の比較

< 植物生理生態 >

優秀賞

- 岡島有規、種子田春彦、寺島一郎(東京大・院・理)
熱収支から見る葉の形態の制限要因
- 山尾僚(岡理院・総情・生地)、片山昇(京大・生態研セ)、波田善夫(岡理・総情・生地)
施肥がアカメガシワの被食防衛戦略に与える影響
- 高山縁、小野清美、隅田明洋、原登志彦(北大・低温研)
ダケカンバの展葉に対する低温の影響とアクアポリンとの関係
- 神山千穂、彦坂幸毅(東北大・院・生命科学)
異なる標高の湿原植物における葉特性の戦略シフト

- 齋藤隆実、曾根恒星、野口航、寺島一郎（東大院理・生物科学）、宮澤真一（農業生物資源研）、林和典（日本製紙森林研）
西オーストラリアの塩害地におけるユーカリ植林木の生長と葉の水分特性
- 今田省吾、山中典和、玉井重信（鳥取大・乾燥地研）
水位変動下におけるウラジロハコヤナギ成長の決定要因と根の成長との関係

<送粉・種子>

優秀賞

- 岡本朋子、後藤龍太郎、加藤真（京大院 人環）
絶対送粉共生関係をかたち作る花の匂いの化学構成と動態
- 高橋明子（京大院・農）、柴田銃江（森林総研・東北）、島田卓哉（森林総研・東北）
どんなドングリが生き残るのか？—非破壊成分分析を用いたコナラ種子の形質の違いが生存過程に与える影響の解明—
- 牧野崇司（筑波大・生命環境）
斜面に咲く花は嫌われる？：傾斜がマルハナバチの訪花頻度に与える影響

<景観生態>

最優秀賞

- 赤坂卓美（北大院農）、赤坂宗光（国環研）、中村太士（北大院農）
同所性コウモリ類3種のハビタット選択性と行動圏サイズ—選択性の特異性に着目して—

優秀賞

- 菅原のえみ、小池文人（横浜国大院・環境情報）
指標植物をもちいた関東地方の里地里山評価
- 市原実（岐阜大院・連農、静岡大・農）、丸山啓輔、足立行徳、山下雅幸、澤田均（静岡大・農）、石田義樹、稲垣栄洋（静岡農技研）、浅井元朗（中央農研）
農地の生物多様性がもたらす雑草種子捕食サービスの定量化—対照的なランドスケープでの比較

<生態系管理・生態学教育>

最優秀賞

- 岡本実希（東大・院・農）、赤坂宗光、中川恵（国環研）、西廣淳（東大・院・農）、高村典子（東大・国環研）
ヒシの繁茂が沈水植物に与える影響 ~ 優占6種の応答の違い

優秀賞

- 岩崎雄一（横国大院・環境情報）、加賀谷隆（東大院・農学生命）、宮本健一（産総研・イノ推）、松田裕之（横国大院・環境情報）
河川底生動物群集に及ぼす亜鉛の影響：許容可能な濃度をどう決めるか？
- 宮崎祐子（奈良県森技セ）、三橋弘宗（兵庫県立人と自然の博物館）、大澤剛士（神戸大・院）
竹林拡大のリスク評価
- 吉岡明良、高田まゆら、鷲谷いづみ（東大院・農学生命）

転作ネズミムギ群落とランドスケープ構造がイネ害虫アカスジカスミカメの個体密度に及ぼす効果

- 鈴木克哉（兵庫県立大）

対人関係が獣害問題を深刻化させる ~ 軋轢解消にむけた社会科学的アプローチの可能性

<動物植物相互作用>

最優秀賞

- 巽真悟、松浦健二（岡山大・院・環境）
シロアリの卵に化ける菌類：フェロモンでシロアリをだます仕組みを解明
- 石崎智美、大原雅（北大・院・環境科学）、塩尻かおり（京大・生態研センター）、Richard Karban（UC Davis・Department of Entomology）
遺伝的近縁度がsagebrush (*Artemisia tridentata*) の植物間コミュニケーションに与える影響

優秀賞

- 後藤龍太郎、岡本朋子、加藤真（京大院 人環）
種子食性送粉者の過剰産卵を罰するウラジロカンコノキの選択的中絶
- 西井絵里子（北海道大学環境科学院）、島田卓哉（森林総合研究所東北支所）、斎藤隆（北海道大学 FSC）
野生下での野ネズミのタンニン馴化機構—タンニン摂取量の季節変動と糞中タンナーゼ活性の関係—

<種多様性>

最優秀賞

- 奥崎穰、高見泰興、曾田貞滋（京大・理）
同所的オオオサムシ亜属種間における体サイズ差の生態的意義：資源分割か？生殖隔離か？

優秀賞

- 山田朋彦、川北篤、加藤真（京大院・人環）
体の伸長と鱗の退化に伴う海岸間隙性ミミズハゼ類の多様化
- 村瀬敦宣、須之部友基（海洋大・館山ス）
屋久島の潮間帯岩礁域における底生魚類群集
- 浅木宏覚（信大・院）、市野隆雄（信大・理）
乗鞍岳の異なる標高地点におけるハネカクシ科昆虫の季節的発生消長

<遷移・更新>

優秀賞

- 佐藤朋華、山月融心、井上みずき、星崎和彦、阿部みどり、蒔田明史（秋田県立大学）
林床の光環境の季節的・空間的不均一性がチシマザサ—斉開花枯死後のブナ稚樹分布に与える影響
- 山田いづみ、紙谷智彦（新潟大・院・自然）
開放方位の異なるスギ林林縁に移植したブナ稚樹の成長反応
- 箱崎真隆（東北大・院・生命科学）、吉田明弘、星野安治、大山幹成、鈴木三男（東北大学植物園）
青森県猿ヶ森における埋没林の樹種組成および生育環境の復元

<動物群集>

優秀賞

- 太田和孝(京大院理)、幸田正典(大阪市大院理)、佐藤哲(長野大・環境ツ)
繁殖資源を共有するタンガニイカ湖産シクリッド4種の共存
- 王婉琳、槻木(加)玲美(東北大・生命)、谷幸則(静岡県立大・環境研)、小田寛貴(名大・年代測定センター)、松田智幸、占部城太郎(東北大・生命)
八幡平湖沼の動植物プランクトンの長期動態:高山湖沼で何が起きているか?
- 松本幸二(新潟大学 農)、箕口秀夫(新潟大学 自然科学系)
多雪地冷温帯林におけるヤチネズミ・アカネズミ・ヒメネズミの林分利用特性
- 福森香代子、酒井陽一郎(京大生態研)、兎本博介(龍谷大理工)、陀安一郎、奥田昇(京大生態研)
湖沼メソコスムにおける体サイズ構成と生態系メタボリズム:捕食者の栄養カスケード効果
- 栗野将、槻木(加)玲美、牧野渡、松島野枝、河田雅圭(東北大・生命)、小田寛貴(名大・年代測定センター)、占部城太郎(東北大・生命)
山形県畑谷大沼における *Daphnia* 複数種の長期変化: Hybrid はいつから形成されたか?

<動物個体群>

優秀賞

- 井川拓也(北海道大・院・水産科学)、岸田治(京都大・生態研セ)、西村欣也(北海道大・院・水産科学研究)
多型を構成する morph 間の対抗性
- 深谷肇一(北大環境)、野田隆史(北大地球環境)、仲岡雅裕(北大 FSC)、山本智子(鹿大水産)、堀正和(瀬戸内水研)、奥田武弘(東北水研)、熊谷直喜、鳥袋寛盛(千葉大自然科学)
イワフジツボの個体群動態:増加率に影響するプロセスの時空間的変動
- 熊田那央、山口典之(東大・農)、加藤ななえ(NPO 法人バードリサーチ)、金井裕((財)日本野鳥の会)、藤田剛、樋口広芳(東大・農)
相互につながりを持つカワウのねぐら・コロニーの個体数変化

<植物個体群>

最優秀賞

- 阪口翔太(京大院・農)、櫻井聖悟(京府大院・生命環境)、竹内やよい、山崎理正、井鷲裕司(京大院・農)
気候変動はハリギリの分布・遺伝的多様性にどのように影響するか—最終氷期・現在・地球温暖化後—
 - 富田基史、陶山佳久(東北大・院・農)、杉田久志(森林総研東北)
近親交配は稚樹個体群のデモグラフィーに影響を与えるか?アカエゾマツ孤立個体群の全個体遺伝子型解析
- #### 優秀賞
- 松尾歩、陶山佳久(東北大・農)、齋藤智之(森林総

研木曾)、住吉千夏子、斎藤誠子、井鷲裕司(京大・農)、柴田昌三(京大・フィールド研)、鈴木準一郎(首都大・理工)、西脇亜也(宮崎大・農)、蒔田明史(秋田県立大・生資)
チュウゴクザサの一斉開花個体群を対象とした遺伝的多様性解析

<菌類・微生物>

優秀賞

- 西田貴明、大串隆之(京大生態研)
植物の誘導抵抗性の発現に関わる菌根共生
- 天野陽介(東邦大・理)
印旛沼におけるツボカビを含めた真菌類の検出

<進化>

最優秀賞

- 松林圭(北大・院理・自然史)、Sih Kahono (LIPI)、片倉晴雄(北大・院理・自然史)
好き嫌いによる種分化は何度も生じた一極端な食草変更が導く適応放散—

優秀賞

- 岩崎貴也(首都大・牧野標本館)、青木京子(京都大・院・人環)、瀬尾明弘(地球環境研)、村上哲明(首都大・牧野標本館)
最終氷期を通して異なる歴史を経たツリバナ集団の接触帯における挙動
- 日室千尋、藤崎憲治(京大院・農・昆虫生態)
再交尾抑制戦術を巡る雌雄間での拮抗的共進化:対抗適応できない雌には悲劇が起こる!!

<数理・分子生物>

最優秀賞

- 細将貴(東北大・生命科学)
右も左もわからないへび:情報利用能力の制約と最適採餌戦略がもたらす非同調的な共進化機構

優秀賞

- 尾崎有紀(奈良女子大・院・人間文化)、岩口伸一、遊佐陽一(奈良女子大・理)
マイクロサテライトマーカーを用いたミョウガガイの矮雄間競争の解明
- 測側太郎、宮竹貴久(岡山大院・環境・進化生態)
交尾時刻が異なるウリミバエ2系統間における時計遺伝子の解析

<動物繁殖・社会生態>

優秀賞

- 山本結花、松浦健二(岡大・院環境・昆虫生態)
シロアリ補充女王の繁殖順位は遺伝的に決まる
- 中野裕子(岡大・院環境・昆虫生態)、松浦健二(岡大・院環境・昆虫生態)
ヤマトシロアリの王と女王の繁殖コンフリクト:女王は王がいるのに単為生殖卵を産む
- 鶴井香織、西田隆義(京大院・農・昆虫生態)
ハラヒシバツタにおける隠蔽 vs. 繁殖:なぜ無紋オス

が存在するのか

<動物生活史>

優秀賞

- 鈴木雄也、山平寿智（新潟大・理）
メダカにおける摂餌量と捕食脆弱性の緯度間変異に関する研究
- 岡野淳一（東北大学生命科学研究科）、菊地永祐（東北大学東北アジア研）
巣材の表面粗さに応答するトビケラの分泌物質
- 阿部真和、山平寿智（新潟大学）
メダカの成長速度の緯度間変異におけるクレード内およびクレード間パターンについて

<外来種・都市>

最優秀賞

- Wiwegweaw, A., Asami, T. (Shinshu Univ.)
Distribution of mtDNA haplotypes against non-reciprocal hybridization between species.
- 佐藤真弓、河口洋一、中島淳（九大・院工）、向井貴彦（岐大・地域）、鬼倉徳雄（九大・院農）
九州における国内移入魚ハスの定着メカニズムの解明
- 竹田千尋（筑波大・生物資源）、門脇正史（筑波大・生命環境）
茨城県穴塚大池におけるウシガエルの食性
- 下野嘉子（畜草研）、小沼明弘（農環研）
輸入穀物に混入する除草剤抵抗性雑草ボウムギー抵抗性をもたらす遺伝変異の有無

<植物繁殖・生活史>

優秀賞

- 久保田涉誠、大原雅（北大・院・環境科学）
オオバナノエンレイソウにおける雄性不稔個体が集団の繁殖様式に与える影響
- 長谷川陽一、陶山佳久、清和研二（東北大院・農）
クリの花粉・果皮・実生のDNA分析による花粉・種子散布パターンの解析
- 松橋彩衣子（東北大・生命）、工藤洋（京大・生態研）、酒井聡樹（東北大・生命）
ミチタネツケバナにおける雄蕊数変異の要因：気温の影響の解析

<物質生産・物質循環>

最優秀賞

- 石川尚人（京大・生態研）、内田昌男（国立環境研）、柴田康行（国立環境研）、陀安一郎（京大・生態研）
河川食物網は年代の異なる炭素を混合している～¹⁴C天然存在比を用いた研究～

優秀賞

- 潮雅之、北山兼弘（京大・生態研センター）
針葉樹の縮合タンニンが土壤栄養塩可給性の変化を介して樹木実生の成長率に与える影響：熱帯山地林での植物-土壌フィードバック

- 根岸正弥（茨城大・理）、廣田充（筑波大・菅平センター）、中野隆志（山梨・環境研）、大塚俊之（岐阜大・流域圏センター）、山村靖夫（茨城大・理）
富士北麓冷温帯アカマツ林における土壌呼吸に占める根呼吸の推定

- 菅尚子（総研大・極域）、内田雅己（極地研）、小泉博（早稲田大・教育）、神田啓史（極地研）
北極ツンドラ生態系における厳冬期の土壌呼吸の行方

<行動>

最優秀賞

- 北村亘、藤田剛、樋口広芳（東大・農・生物多様性）
異なる時間スケールの解析で明らかになる begging の機能
- 森英章（自然研）、千葉聡（東北大・生命科学）、辻和希（琉球大・農）
働かないアリどうしのケンカーアミメアリ種内社会寄生者間の繁殖競争—
- 山本宇彦（九大・生態）、粕谷英一（九大・生態）
ノネコオスの配偶行動；求愛投資は一繁殖期内でどう変わるのか
- 横井智之、藤崎憲治（京大院・農・昆虫生態）
ホソヒメヒラタアブの“ためらい行動”は捕食者回避に有効か
- 中山慧、宮竹貴久（岡大院・環境）
死にまねで本当に捕食者から逃げられるのか？—コクヌストモドキとコメグラサシガメの場合—

<保全>

最優秀賞

- 吉田康子（筑波大・生命環境）、上野真義（森林総研）、北本尚子、小玉昌孝（筑波大・生命環境）、本城正憲（東北農研）、田口由利子（森林総研）、永井美穂子、鷲谷いづみ（東大・農学生命）、津村義彦（森林総研）、大澤良（筑波大・生命環境）
適応に関連した QTL に基づく野生サクラソウ集団の遺伝的多様性評価

優秀賞

- 大林夏湖、程木義邦、國井秀伸（島根大学汽水域研究センター）
斐伊川水系における準絶滅危惧種オオクグの遺伝的多様性評価
- 横川昌史、兼子伸吾（京大院・農）、瀬井純雄（阿蘇花野協会）、高橋佳孝（近中四農研）、井鷲裕司（京大院・農）
草原性絶滅危惧植物ハナシノブの全残存集団の網羅的遺伝解析
- 池上佑里、西廣淳、鷲谷いづみ（東大・農学生命科学）
茨城県北浦流域における谷津奥部の水田耕作放棄地に成立した植生の保全生態学的評価

Ⅲ. 生態学琵琶湖賞報告

第15回生態学琵琶湖賞受賞者

中村太士氏（北海道大学大学院農学研究科）

生態学琵琶湖賞の報告

第15回生態学琵琶湖賞授賞式が滋賀県知事公館で、2009年7月4日に開催された。琵琶湖賞は20年近い歴史をもち、そうそうたる受賞者を輩出してきた格式のある賞である。今回は日本生態学会が主体となって実施する初めての機会であり、新生第1回の授賞式でもある。どのような経緯で、日本生態学会が実施主体となったかについては、学会ホームページで紹介したのでここでは繰り返さない。どこが変わったかを一言で言えば、賞金がなくなったことである。

今まで500万円もあった賞金が全くのゼロである。それで賞の格式が保てるのか。その心配は幸いにして杞憂であった。立派な応募者が何名もあり、その中でも特に立派な方を受賞者として選ぶことができた。北海道大学の中村太士さんが新生第1回の受賞者である。「立派」であったゆえには、受賞記念講演が実に興味深いものであったからである。いままで、悠然と蛇行していた川を人間は溝のようにまっすぐな流れにしてしまった。それをまた蛇行させようという試みである。そうしたら、川に棲む生物はどのように変わり、どんな影響を受けるのか。北海道らしい、壮大な実験である。もちろん、このような大きな仕事は研究者個人の力でなしうることはない。行政をもまきこんだ、生態系修復の仕事の中で、研究を行いデータをとっていく。これは人類紀（今回のインテコルのプレナリー講演でピーター・ビトウセックが提唱したAnthropoceneの私訳）における生態学者のあるべき研究スタイルといえるだろう。

賞金なしとはいえ、このような賞を全くお金なしで出来るわけではない。会場の準備や広報は、主に滋賀県にお願いした。運営委員会、選考委員会などを開催しなければならない。受賞者の旅費も必要だ。それ以外にも思わぬところでお金がかかる。それについては日本生態学会が中心となって、琵琶湖賞を支える会を立ち上げていただき、募金をしていただいた。会員の皆様にこの場を借りてお礼申し上げたい。

第16回生態学琵琶湖賞は2011年7月に授賞式を行う予定である。来年には公募を行う。応募時に50歳以下、立派な業績をあげている方、あげる可能性のある方が対象だ。陸水や海洋を研究している方の受賞が多いが、陸上の生物だって、すべて水に関係する。できるだけ広い範囲の多くの方々に応募していただきたいと考えている。（生態学琵琶湖賞運営委員長 菊沢喜八郎）

Ⅳ. 書評依頼図書（2009年3月～2009年8月）

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局（office@mail.esj.ne.jp）までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載され

るようご準備下さい。

1. 大串隆之・近藤倫生・仲岡雅裕編「群集生態学4 生態系と群集をむすぶ」(2009) 256pp. 京都大学学術出版会 ISBN:978-4-87698-346-9
2. デイビット・ウィルキンソン著 金子信博訳「生物多様な星の作り方 生態学からみた地球システム」(2009) 232pp. 東海大学出版会 ISBN:978-4-486-01798-1
3. 大串隆之・近藤倫生・吉田丈人編「群集生態学2 進化生物学からせまる」(2009) 332pp. 京都大学学術出版会 ISBN:978-4-87698-344-5
4. 田中克・田川正朋・中山耕至著「稚魚生残と変態の生理生態学」(2009) 390pp. 京都大学学術出版会 ISBN:978-4-87698-774-0
5. 菱川晶子著「狼の民俗学人獣交渉史の研究」(2009) 422pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-056305-5
6. 藤崎憲治・西田律夫・佐久間正幸編「昆虫科学が開く未来」(2009) 582pp. 京都大学学術出版会 ISBN:978-4-87698-775-7
7. 西野麻知子編著「とりもどせ！琵琶湖・淀川原風景－水辺の生物多様性保全に向けて－」(2009) 300pp. サンライズ出版株式会社 ISBN:978-4-88325-352-4
8. 柴田叡弼・日野輝明編著「大台ヶ原の自然史 森の中のシカをめぐる生物間相互作用」(2009) 302pp. 東海大学出版会 ISBN:978-4-486-01830-8

9. 倉谷うらら著「フジツボ 魅惑の足まねき」(2009) 122pp. 岩波書店 ISBN:978-4-00-007499-5
10. 青木人志著「日本の動物法」(2009) 274pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-063330-7
11. 大路樹生著「フィールド古生物学」(2009) 158pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-062715-3

Ⅴ. 寄贈図書

1. 「Journal of Environmental Information Science Vol.37, No.5」(2009) 228pp. CEIS
2. 「Kihara Memorial Foundation NEWSLETTER No.25」(2008) 20pp. 木原記念横浜生命科学振興財団
3. 「国際生物学オリンピック 2007・2008 年度報告書」(2009) 42pp. 国際生物学オリンピック日本委員会
4. 「果樹研究所研究報告 第8号」(2009) 42pp. 農研機構果樹研究所
5. 「果樹研究所研究報告 第9号」(2009) 32pp. 農研機構果樹研究所
6. 「多摩川 第122号」(2009) 16pp. 財団法人とうきゅう環境浄化財団
7. 「高木基金だより No.21」(2009) 16pp. 高木仁三郎市民科学基金
8. 「東京大学海洋研究所ニューズレター No.18」(2009) 16pp. 東京大学海洋研究所
9. 「CIC NEWSLETTER NO.7 2009」(2009) 8pp. 東京大学海洋研究所

Ⅵ. 後援・協賛

日本生態学会では、下記のシンポジウム・セミナーを後援・協賛しました。

- 2009年度コスモスセミナー自然観察教室
「集まれ昆虫好きな子供たち2009」
日時：2008年8月3日（月）～8月5日（水）
場所：関西学研都市・清滝・室池地区「アイ・アイ・ランド」
- 2009年植生学会主催シンポジウム「日本の自然林へのシカの影響を考える」
日時：2009年7月4日（土）
場所：東京農業大学世田谷キャンパス
- 平成21年度「女子中高生夏の学校2009～科学・技術者のたまごたちへ～」
期間：平成21年8月13日（木）～15日（土）
場所：国立女性教育会館
- ダーウィン生誕200周年記念シンポジウム「ダーウィンを超えて—21世紀の進化学」
日時：2009年8月22日（土）
場所：東京大学安田講堂

- 平成21年12月10日（当日消印有効）
- 財団法人 下中記念財団事務局
〒162-0843 東京都新宿区市谷田町2-7
伊東ハイム301号
TEL:03(5261)5688 FAX:03(3266)0352

2. 第25回（2009）京都賞記念ワークショップ基礎科学部門シンポジウム「進化・種分化・長期フィールド研究」

- 日時：平成21年11月12日（木）13:00～17:10
場所：国立京都国際会館
受賞者：ピーター・レイモンド・グラント博士
バーバラ・ローズマリー・グラント博士
（プリンストン大学名誉教授）
企画者：巖佐庸（九州大学教授）
受賞者紹介：重定南奈子（同志社大学教授）
講演者：ピーター・レイモンド・グラント博士
バーバラ・ローズマリー・グラント博士
岡田典弘（東京工業大学教授）
加藤真（京都大学教授）
中村浩志（信州大学教授）
矢原徹一（九州大学教授）
主催：財団法人 稲盛財団

お知らせ

1. 公募

日本生態学会に寄せられた公募について、①対象、②助成又は賞などの内容、③応募締め切り、④申し込み・問い合わせ先をお知らせします。

(1) 第13回 尾瀬賞

- 「湿原」に関する学術研究を顕彰することにより、この分野の学問的・学際的研究の伸展を図るとともに、環境保護に関する関心を高めることを目的とする。
- 2名以内。1名につき賞状および賞金100万円
- 2009年10月31日（当日消印有効）
- 財団法人尾瀬保護財団事務局「尾瀬賞」係
〒371-8570 群馬県前橋市大手町一丁目1-1
群馬県庁内
電話：027-220-4431 ファックス：027-220-4421

(2) 鹿島学術振興財団2009年度研究助成

- 都市・住居環境の整備（都市並びに住居環境の向上、災害・公害の防止、交通・輸送力の向上）
国土・資源の有効利用（国土の有効利用と保全、海洋の利用と保全、水資源の確保と有効利用、エネルギーおよび資源の有効利用・輸送・貯蔵、廃棄物の処理と再資源化）
文化的遺産・自然環境の保全（文化的遺産の保全、自然環境の保全）
- 総額4,500万円、1件あたり300万円
- 2009年11月20日（金）
- 日本生態学会事務局（学会推薦が必要です）

(3) 第48回（平成21年度）下中科学研究助成金

- 学校の先生方の教育のための真摯な研究を助成し、その発展を願うためのもの
- 総額900万円。1件当り30万円。30件を予定

書評

「発芽生物学 種子発芽の生理・生態・分子機構」種生物学会編 吉岡俊人・清和研二責任編集 文一総合出版 pp.436 ISBN:978-4-8299-1072-6

以前林業試験場と名の付くところに勤務していたので、種子の発芽については人並みに興味をもっていた。特に大きな種子をもつものと、小さいものとの違いは？などということには誰も考えるように、当時流行していたr-K戦略説などから、興味をもち始めていた。この本の編者である清和君は、種子サイズの小さなモノは散布距離が長くなり、ギャップ発見の確率が高くなる、などという文献を、セミナーで紹介してくれた。「遠くまで行ったからといって、良い場所があるとはかぎらないんじゃないの？」などと意地の悪い質問をしていじめた記憶がある。ギャップの生成がランダムだとしたら、どこへ行こうと同じではないか？しかし、血縁者間の競争は緩和されるかもしれない。これについては、数学の出来る若い人たちが興味をもち、論文にまとめてくれた。

土壌表面の凸凹が問題じゃないか？種子が小さいと凹のところへうまくはまりこんで、吸水で有利ではないのか。この話でも随分盛り上がったが、結局実験してみるしかない、ということになった。異なるサイズの人工種子を、これまた人工的に作った土壌表面に散布し、吸水量を測定した。吸水量を「種子」サイズのアロメトリーで記述し、やはりこの本の執筆者である小山浩正君と共著で「種子吸水のスケーリング」という論文にまとめた。そのとき、対照として現実の種子の吸水量も測ってみ

た。身近にある種子、ヒマワリやタンポポからはじめて、トチノキ、ハルニレなども発芽させた。それ以外にどんな植物を扱ったかは忘れてしまったけれども、こちらのほうは、種間横断の比較でも、アイソメトリーつまり種子重に正比例ということできそうであった。なかにはいくら待っても吸水をはじめてくれない種子があった。半分くらいしか発芽しない場合もあったが、発芽したものをデータとして使用した。

様々な種子を実際に散布するというのもずいぶんとやった。散布しても、ネズミに食われてしまうという「失敗」も多かった。これらの経験は清和さんが精力的に論文にまとめ、またこの本でも小山・清和共著の「発芽生態実験」となって結実している。ネズミに食われてしまうのを「失敗」ととらえずに、野外操作実験の一つの要因と考えているところが、彼らの進歩である。

というわけで、この本の編者や著者達とは浅からぬ因縁があるために、書評を頼まれるにいたったわけである。この本は5部15章に分かれていて、種子発芽の生理学、生態学、分子生物学そして実験法といった各々が、それぞれ丁寧に解説されている。一言でいって、内容豊富でかつ大変親切な本である。逆に言えば、いささか盛りだくさんすぎるとも思える内容である。それを救っているのが各章に付け加えられた、ほぼ同数のコラムである。コラムの著者達もまた、それぞれ気鋭の研究者であり、息抜きに読める内容のものもあるが、一つの独立した章として扱っても恥ずかしくない内容を含んだものもある。

第1部第1章はこの業界では有名な大著「Seeds」の著者であり、種子発芽の生理生態学の権威である Baskin 妻夫による種子休眠に関する概説である。1万に近い種について種子休眠が分類されていて、この章を読んでおけば大著を読まずに済むと言うことではないけれども、最近の進歩もとりいれた立派な解説になっていて、編者らが「贈り物」と名付けられたゆえんもよくわかる。気づくのは、休眠の分類の基準が、たとえば「30日以内に胚が成長して発芽にいたる」などとあるように、未だ「操作的である」ということである。すでに調べ尽くされてように見えていても、まだまだこれからの分野なのだ、という気がする。

種子は「発芽してなんぼ」のものではあるけれども、不適な時期にうかつに発芽してしまえば、それで一生が終わりになってしまう。「うかつに発芽しない」ことも種子にとっては発芽することと同様に重要である。このあたりのことが種子発芽の生理学、生態学に深みを与えているのだろう。第2部では第一部に引き続いて、休眠と発芽の生理学が具体的な対象植物について展開されている。何気なく書かれたように見えるコラムにも「これは」と思える内容を含んでいる。

種子は自分で移動できないから、なんらかの媒体に運んで貰うしかない。発芽場所が不適であった場合は休眠して待つことになる。埋土種子として待機することを強いられる。しかし実は、埋土種子は単に受動的なものではなく、火入れや出水などの環境変化に対応したたかな戦略であることも理解させてくれる。また、埋土種子集団を使って、失われた希少植物集団内の変異を再生することもできる。発芽するにしても一斉に発芽するか、長期間にわたって少しずつ発芽させるか、さまざまなパターンがあることを教えてくれる。ひとつの親植物が二つ以上のタイプの種子を作る場合もある。こういった多型もまた環境の変動に対応した植物の戦略であることが解る。種子植物の重要な散布法である鳥による種子散布とその種子の発芽特性はきわめて興味深い内容であり、特有の休眠・発芽特性をもっているが、それに関する研究紹介や実験法の紹介が少ないように思われた。

生態学研究センターに勤務していたとき、学位は生物学専攻の植物学系で審査した。私も審査に加わったが、分子系の研究にはなじみがなくとまどうことが多かった。2, 3回審査に参加したら、パターンが読めてきた。モデル植物を使って、着目する表現型の突然変異株を探す。見あたらない場合は作り出す。変異株と野生株の遺伝子型を比較し、どの遺伝子が表現型を支配しているのか探り出す、といった手法である。さらにその塩基配列に手を加えるなどの手法も開発されている。種子休眠の維持にはアブサイシン酸、発芽にはジベレリンといういづれもホルモンが関与している。ホルモンの働きは統御、種皮の軟弱化機構、貯蔵デンプンの分解などの分子機構が第4部で解説される。

第5部は実際の実験法の解説で光処理、温度処理、ガス処理、分析法、埋土種子の調査法、野外や室内に種子をまく方法そしてデータ解析の方法までが解説されている。盛りだくさんの内容だが、それぞれ練達の著者が自分の体験をもとに書かれているので、読んでいるうちに自分でもやれそうな気がしてくる。ただし、実際にやってみればそうは簡単ではないのだろうな。利用者とのやりとりを通じて、内容がさらに改善されることが望まれる。

各部はよく工夫され、記述も解りやすい。章間にいくらか重複があるが気になるほどではない。内容は私自身が材料をいじっていた頃にくらべて格段に進歩している。それは分子機構の解析といった、研究技術の進歩や進歩した技術の導入にとまなう部分もあれば、相変わらず泥臭い仕事ではあるが、「種」を単位とした平均的な取り扱いから、「変異」の意味や「失敗」の意味を考えようという研究者の姿勢の進歩に基づいているものもある。21世紀初頭におけるこの分野の進歩を示す記念碑的労作であると評価し、編者、著者の労を多としたい。

(菊沢喜八郎)

日本生態学会役員一覧

会長	矢原 徹一	2008.1 ~ 2009.12
次期会長	中静 透	2010.1 ~ 2011.12
幹事長	粕谷 英一	2009.1 ~ 2010.12
庶務幹事	江口 和洋	2009.1 ~ 2010.12
会計幹事	上野 高敏	2009.1 ~ 2010.12
会計監事	山内 淳	2008.1 ~ 2010.12
	夏原 由博	2009.1 ~ 2011.12

全国委員会

全国区	石濱 史子	2008.1 ~ 2009.12
	伊藤 哲	2008.1 ~ 2009.12
	河田 雅圭	2008.1 ~ 2009.12
	久米 篤	2008.1 ~ 2009.12
	甲山 隆司	2008.1 ~ 2009.12
	齊藤 隆	2008.1 ~ 2009.12
	酒井 聡樹	2008.1 ~ 2009.12
	高村 典子	2008.1 ~ 2009.12
	辻 和希	2008.1 ~ 2009.12
	津田 みどり	2008.1 ~ 2009.12
	半場 祐子	2008.1 ~ 2009.12
	日浦 勉	2008.1 ~ 2009.12
	松田 裕之	2008.1 ~ 2009.12
	宮下 直	2008.1 ~ 2009.12
	吉田 丈人	2008.1 ~ 2009.12
地方区	野田 隆史 (北海)	2008.1 ~ 2009.12
	柴田 銃江 (東北)	2008.1 ~ 2009.12
	池田 浩明 (関東)	2008.1 ~ 2009.12
	井田 秀行 (中部)	2008.1 ~ 2009.12
	湯本 貴和 (近畿)	2008.1 ~ 2009.12
	中根 周歩 (中四)	2008.1 ~ 2009.12
	西脇 亜也 (九州)	2008.1 ~ 2009.12

常任委員会

会長 (矢原)		
幹事長 (粕谷)		
常任委員	池田 浩明	2008.1 ~ 2009.12
	齊藤 隆	2008.1 ~ 2009.12
	西脇 亜也	2008.1 ~ 2009.12
	半場 祐子	2008.1 ~ 2009.12
	日浦 勉	2008.1 ~ 2009.12
	宮下 直	2008.1 ~ 2009.12
	原 登志彦	2009.3 ~ 2009.12
	湯本 貴和	2009.3 ~ 2009.12

次期会長 (中静)

ER 編集委員長 (河田)

生態学会誌編集委員長 (堀)

保全生態学研究編集委員長 (角野)

将来計画専門委員長 (可知)

自然保護専門委員長 (立川)

生態教育専門委員長 (嶋田)

大会企画委員長 (宮竹)

庶務幹事 (江口)

会計幹事 (上野)

Ecological Research 編集委員会

編集委員長	河田 雅圭	2008.1 ~ 2010.12
編集幹事	中静 透	2008.1 ~ 2010.12
	占部 城太郎	2008.1 ~ 2010.12
	佐竹 暁子	2008.1 ~ 2010.12
編集委員	市岡 孝朗	2008.1 ~ 2010.12
	岩田 智也	2008.1 ~ 2010.12
	江口 和洋	2008.1 ~ 2010.12
	大園 享司	2008.1 ~ 2010.12
	梶 光一	2008.1 ~ 2010.12
	久保田 康裕	2008.1 ~ 2010.12
	工藤 岳	2008.1 ~ 2010.12
	久米 篤	2008.1 ~ 2010.12
	木庭 啓介	2008.1 ~ 2010.12
	酒井 章子	2008.1 ~ 2010.12
	佐藤 一憲	2008.1 ~ 2010.12
	島田 卓哉	2008.1 ~ 2010.12
	陶山 佳久	2008.1 ~ 2010.12
	関島 恒夫	2008.1 ~ 2010.12
	高村 典子	2008.1 ~ 2010.12
	瀧本 岳	2008.1 ~ 2010.12
	仲岡 雅裕	2008.1 ~ 2010.12
	長谷川 雅美	2008.1 ~ 2010.12
	原 正利	2008.1 ~ 2010.12
	伴 修平	2008.1 ~ 2010.12
	半場 祐子	2008.1 ~ 2010.12
	彦坂 幸毅	2008.1 ~ 2010.12
	日野 輝明	2008.1 ~ 2010.12
	福井 学	2008.1 ~ 2010.12
	正木 隆	2008.1 ~ 2010.12
	松尾 奈緒子	2008.1 ~ 2010.12
	宮下 直	2008.1 ~ 2010.12
	大塚 俊之	2008.4 ~ 2010.12
	菊沢 喜八郎	2008.4 ~ 2010.12
	清和 研二	2008.4 ~ 2010.12
	Robert Arlinghaus	2008.1 ~ 2010.12
	Michael Boots	2008.1 ~ 2010.12
	Barry W. Brook	2008.1 ~ 2010.12
	Min Cao	2008.1 ~ 2010.12
	Jae Chun Choe	2008.1 ~ 2010.12
	Franck Courchamp	2008.1 ~ 2010.12
	Stuart J Davies	2008.1 ~ 2010.12
	Angus Davison	2008.1 ~ 2010.12
	Tom J. de Jong	2008.1 ~ 2010.12
	Jingyun Fang	2008.1 ~ 2010.12
	Raghavendra Gadagkar	2008.1 ~ 2010.12
	Rhett Harrison	2008.1 ~ 2010.12
	Sun-Kee Hong	2008.1 ~ 2010.12
	John G. Kie	2008.1 ~ 2010.12
	Andrew Liebhold	2008.1 ~ 2010.12
	Mathew Leibold	2008.1 ~ 2010.12
	Simon A. Levin	2008.1 ~ 2010.12

Mark D. Scheuerell 2008.1 ~ 2010.12
 Janne Sundell 2008.1 ~ 2010.12
 Simon Thrush 2008.1 ~ 2010.12
 Marinus J.A. Werger 2008.1 ~ 2010.12
 Ping Xie 2008.1 ~ 2010.12
 Hoi Sen Yong 2008.1 ~ 2010.12
 David W. Inouye 2008.1 ~ 2010.12
 Erling J. Solberg 2008.1 ~ 2010.12
 Kari Klanderud 2008.1 ~ 2010.12
 Bas W. Ibelings 2008.1 ~ 2010.12

日本生態学会誌編集委員会

編集委員長 堀 良通 2008.1 ~ 2010.12
 編集幹事 山村 靖夫 2008.1 ~ 2010.12
 北出 理 2008.1 ~ 2010.12
 森野 浩 2008.1 ~ 2010.12
 編集委員 井鷲 裕司 2008.1 ~ 2010.12
 市岡 孝朗 2008.1 ~ 2010.12
 奥田 昇 2008.1 ~ 2010.12
 奥田 敏充 2008.1 ~ 2010.12
 鎌田 直人 2008.1 ~ 2010.12
 木村 和喜夫 2008.1 ~ 2010.12
 古賀 庸憲 2008.1 ~ 2010.12
 小林 剛 2008.1 ~ 2010.12
 近藤 倫生 2008.1 ~ 2010.12
 酒井 聡樹 2008.1 ~ 2010.12
 鈴木 まほろ 2008.1 ~ 2010.12
 辻 和希 2008.1 ~ 2010.12
 津田 みどり 2008.1 ~ 2010.12
 中丸 麻由子 2008.1 ~ 2010.12
 野田 隆史 2008.1 ~ 2010.12
 日浦 勉 2008.1 ~ 2010.12
 彦坂 幸毅 2008.1 ~ 2010.12
 三浦 徹 2008.1 ~ 2010.12
 安井 行雄 2008.1 ~ 2010.12
 大塚 俊之 2008.1 ~ 2010.12
 田中 健太 2008.4 ~ 2010.12

保全生態学研究編集委員会

編集委員長 角野 康郎 2009.4 ~ 2011.12
 編集幹事 西廣 淳 2009.4 ~ 2011.12
 三橋 弘宗 2009.4 ~ 2011.12
 編集委員 石井 実 2009.4 ~ 2011.12
 石濱 史子 2009.4 ~ 2011.12
 井上 幹生 2009.4 ~ 2011.12
 植田 睦之 2009.4 ~ 2011.12
 梅原 徹 2009.4 ~ 2011.12
 加藤 真 2009.4 ~ 2011.12
 角谷 拓 2009.4 ~ 2011.12
 河口 洋一 2009.4 ~ 2011.12
 倉本 宣 2009.4 ~ 2011.12
 小池 裕子 2009.4 ~ 2011.12
 小池 文人 2009.4 ~ 2011.12
 高槻 成紀 2009.4 ~ 2011.12

館野 正樹 2009.4 ~ 2011.12
 中越 信和 2009.4 ~ 2011.12
 中丸 麻由子 2009.4 ~ 2011.12
 長谷川雅美 2009.4 ~ 2011.12
 長谷川真理子 2009.4 ~ 2011.12
 早矢仕有子 2009.4 ~ 2011.12
 藤井 伸二 2009.4 ~ 2011.12
 増田 理子 2009.4 ~ 2011.12
 松田 裕之 2009.4 ~ 2011.12
 山本 智子 2009.4 ~ 2011.12
 湯本 貴和 2009.4 ~ 2011.12
 鷺谷 いづみ 2009.4 ~ 2011.12

自然保護専門委員会

委員長 立川 賢一：海洋 2008.3 ~ 2010.3
 副委員長 加藤 真：近畿 2008.3 ~ 2010.3
 幹事 吉田 丈人：自然公園 2008.3 ~ 2010.3

地区委員 紺野 康夫：北海 2008.3 ~ 2010.3
 佐藤 謙：北海 2008.3 ~ 2010.3
 竹原 明秀：東北 2008.3 ~ 2010.3
 鈴木 孝男：東北 2008.3 ~ 2010.3
 向井 宏：関東 2008.3 ~ 2010.3
 川上 和人：関東 2009.3 ~ 2010.3
 井田 秀行：中部 2008.3 ~ 2010.3
 和田 直也：中部 2008.3 ~ 2010.3
 角野 康郎：近畿 2008.3 ~ 2010.3
 安溪 遊地：中四 2008.3 ~ 2010.3
 大田 直友：中四 2008.3 ~ 2010.3
 逸見 泰久：九州 2008.3 ~ 2010.3
 伊澤 雅子：九州 2008.3 ~ 2010.3
 鈴木 信彦：九州 2008.3 ~ 2010.3

専門別委員 増沢 武弘：高山・亜高山 2008.3 ~ 2010.3
 竹門 康弘：陸水 2008.3 ~ 2010.3
 清水 善和：島嶼 2008.3 ~ 2010.3
 久保田康裕：熱帯・亜熱帯 2008.3 ~ 2010.3

竹中 千里：大気汚染 2008.3 ~ 2010.3
 矢原 徹一：IUCN 2008.3 ~ 2010.3
 村上 興正：環境行政 2008.3 ~ 2010.3
 横畑 泰志：寄生生物 2008.3 ~ 2010.3
 三浦 慎吾：鳥獣管理 2008.3 ~ 2010.3
 陶山 佳久：遺伝子 2008.3 ~ 2010.3

将来計画専門委員会

委員長 可知 直毅 2009.4 ~ 2011.3
 副委員長 半場 祐子 2009.4 ~ 2011.3
 巖佐 庸 2009.4 ~ 2011.3
 大橋 一晴 2009.4 ~ 2011.3

	粕谷 英一	2009.4 ~ 2011.3
	酒井 聡樹	2009.4 ~ 2011.3
	酒井 章子	2009.4 ~ 2011.3
	辻 和希	2009.4 ~ 2011.3
	野田 隆史	2009.4 ~ 2011.3
	花里 孝幸	2009.4 ~ 2011.3
	安井 行雄	2009.4 ~ 2011.3
	奥田 昇	2009.4 ~ 2011.3
	湯本 貴和	2009.4 ~ 2011.3
常任オブザーバー	松本 忠夫	2009.4 ~ 2011.3

生態学教育専門委員会

委員長	嶋田 正和	2008.4 ~ 2010.3
	山村 靖夫	2008.4 ~ 2010.3
	西脇 亜也	2008.4 ~ 2010.3
	林 浩二	2008.4 ~ 2010.3
	広瀬 祐司	2008.4 ~ 2010.3
	久保田康裕	2008.4 ~ 2010.3
	中村 雅彦	2008.4 ~ 2010.3
	山路 恵子	2008.4 ~ 2010.3
	中井 咲織	2009.3 ~ 2011.3
	浅見 崇比呂	2009.3 ~ 2011.3

大規模長期生態学専門委員会

委員長	日浦 勉	2008.3 ~ 2010.3
	甲山 隆司	2008.3 ~ 2010.3
	佐竹 暁子	2008.3 ~ 2010.3
	鈴木 準一郎	2008.3 ~ 2010.3
	仲岡 雅裕	2008.3 ~ 2010.3
	中村 誠宏	2008.3 ~ 2010.3
	三枝 信子	2008.3 ~ 2010.3
	大手 信人	2008.3 ~ 2010.3
	正木 隆	2008.3 ~ 2010.3
	柴田 英昭	2008.3 ~ 2010.3

生態系管理専門委員会

委員長	竹門 康弘：河川	2008.4 ~ 2010.3
副委員長	松田 裕之：管理モデル	2008.4 ~ 2010.3
	村上 興正：自然保護	2008.4 ~ 2010.3
	中越 信和：景観生態	2008.4 ~ 2010.3
	中根 周歩：森林	2008.4 ~ 2010.3
	田村 典子：森林	2008.4 ~ 2010.3
	鎌田 磨人：森林・河川	2008.4 ~ 2010.3
	津田 智：草原	2008.4 ~ 2010.3
	高村 典子：湖沼	2008.4 ~ 2010.3
	西廣 淳：湖沼	2008.4 ~ 2010.3
	角野 康郎：湖沼・水田	2008.4 ~ 2010.3
	日鷹 一雅：水田・農耕地	2008.4 ~ 2010.3

	波田 善夫：湿地	2008.4 ~ 2010.3
	神田 房行：湿地	2008.4 ~ 2010.3
	加藤 真：渚・生物間相互作用	2008.4 ~ 2010.3
	国井 秀伸：汽水・河口	2008.4 ~ 2010.3
	佐藤 利幸：高山	2008.4 ~ 2010.3
	矢原 徹一：植物	2008.4 ~ 2010.3
	中村 太士：河川	2008.4 ~ 2010.3
	立川 賢一：海洋	2008.4 ~ 2010.3
	向井 宏：海洋	2008.4 ~ 2010.3
	椿 宜高：個体群	2008.4 ~ 2010.3
	嶋田 正和：管理モデル	2008.4 ~ 2010.3
	長谷川真理子：科学技術政策	2008.4 ~ 2010.3
	鷺谷 いづみ：保全生物学全般	2008.4 ~ 2010.3
	塩坂 比奈子：普及	2008.4 ~ 2010.3

日本生態学会賞及び宮地賞選考委員会

	河田 雅圭	2007.8 ~ 2009.12
	齊藤 隆	2007.8 ~ 2009.12
	杉本 敦子	2007.8 ~ 2009.12
	辻 和希	2008.8 ~ 2010.12
	津田 みどり	2008.8 ~ 2010.12
	永田 俊	2008.8 ~ 2010.12
	井鷲 裕司	2009.5 ~ 2011.12
	久米 篤	2009.5 ~ 2011.12
	宮下 直	2009.5 ~ 2011.12

ER 論文賞選考委員会

(任期は Ecological Research 編集委員会と同じ)

委員長	河田 雅圭
	粕谷 英一
	Ecological Research 編集委員

大会企画委員会

委員長	宮竹 貴久	2007.1 ~ 2010.3
副委員長	大手 信人	2007.1 ~ 2010.3
運営部会	鈴木 まほろ	2007.1 ~ 2010.3
	竹中 明夫	2005.1 ~ 2011.3
	難波 利幸	2005.1 ~ 2011.3
	齊藤 隆	2005.1 ~ 2011.3
	牧 陽之助	2008.4 ~ 2011.3
	市岡 孝朗	2008.4 ~ 2011.3
	嶋田 正和	2008.4 ~ 2011.3
	畑田 彩	2009.4 ~ 2012.3
	長谷川成明	2009.4 ~ 2012.3
広報部会	可知 直毅	2009.4 ~ 2012.3
シンポジウム部会	巖佐 庸	2007.1 ~ 2010.3
	島田 卓哉	2007.1 ~ 2010.3

	田村 典子	2007.1 ~ 2010.3
	榎木 勉	2008.4 ~ 2011.3
	古賀 庸憲	2008.4 ~ 2011.3
	富松 裕	2008.4 ~ 2011.3
	松浦 健二	2009.4 ~ 2012.3
	黒田 啓行	2009.4 ~ 2012.3
	島野 光司	2009.4 ~ 2012.3
	谷内 茂雄	2009.4 ~ 2012.3
	吉田 圭一郎	2009.4 ~ 2012.3
	半場 祐子	2009.4 ~ 2012.3
	森田 健太郎	2009.4 ~ 2012.3
	保原 達	2009.4 ~ 2012.3
	隅田 明洋	2009.4 ~ 2012.3
発表編成部会		
	吉田 丈人	2007.1 ~ 2010.3
	永田 尚志	2007.1 ~ 2010.3
	池田 浩明	2008.4 ~ 2011.3
	鏡味 麻衣子	2008.4 ~ 2011.3
	柴田 銃江	2008.4 ~ 2011.3
	松政 正俊	2008.4 ~ 2011.3
	廣部 宗	2009.4 ~ 2012.3
	久保 拓弥	2009.4 ~ 2012.3
ポスター賞部会		
	工藤 岳	2007.1 ~ 2010.3
	清水 孝昭	2007.1 ~ 2010.3
	津田 みどり	2008.4 ~ 2011.3
	関川 清広	2008.4 ~ 2011.3
	及川 真平	2008.4 ~ 2011.3
	松木 佐和子	2008.4 ~ 2011.3
	関 剛	2009.4 ~ 2012.3
	中野 大助	2009.4 ~ 2012.3

(高校生ポスター担当)

山村 靖夫	2009.4 ~ 2010.3
広瀬 祐司	2009.4 ~ 2010.3
中井 咲織	2009.4 ~ 2010.3
久保田 康裕	2009.4 ~ 2010.3
浅見 崇比呂	2009.4 ~ 2010.3
嶋田 正和	2009.4 ~ 2010.3

野外安全管理委員会

委員長	鈴木 準一郎	2005.1 ~ 2010.3
	大館 智志	2005.1 ~ 2010.3
	粕谷 英一	2005.1 ~ 2010.3
	森広 信子	2005.1 ~ 2010.3
	山下 直子	2005.1 ~ 2010.3
	湯本 貴和	2005.1 ~ 2010.3
	関野 樹	2006.4 ~ 2010.3
	本間 航介	2006.4 ~ 2010.3
	飯島 明子	2008.8 ~ 2010.3

法人化検討委員会

委員長	石川 真一
	矢原 徹一
	中静 透
	三橋 弘宗
	足立 直樹
	難波 利幸
	鈴木 伸一
	粕谷 英一



京都大学
生態学研究センター
Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3
Tel : (077) 549-8200 (代表), Fax : (077) 549-8201
センター長 椿 宜高

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page : <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

2009 (平成 21) 年度センター活動予定

生態学研究センターにおける2009年度の活動予定は以下の通りです。

センターニュース、セミナーなど、センターの最新情報は、ホームページ (<http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>) で公開しています。

1. プロジェクト

2007年度から始まったグローバルCOE「生物の多様性と進化研究のための拠点形成—ゲノムから生態系まで—」(研究代表者:阿形清和)(文部科学省研究拠点形成費補助金)、2008年度から始まった「生物多様性を促進する生物間相互作用ネットワーク—ゲノムから生態系まで—」(研究代表者:高林純示)(日本学術振興会先端拠点事業—拠点形成型—)などの大型共同研究が進められている。また、流動連携機関である総合地球環境学研究所との3つの共同企画プロジェクト、地球環境研究総合推進費による共同研究(4件)、科学研究費補助金による共同研究(5件)も進められている。

2. 協力研究員

引き続き、協力研究員(Affiliated Scientist)を公募する。

3. 公募型共同利用事業

2009年度公募型共同利用事業として、分野間の交流や若手研究者の育成の観点から、以下の4件の研究会、1件のセミナー、3件の野外実習が採択された。開催の日程などの詳細は、センターホームページに掲載する。

〈研究会〉

- 1) 「メスとオスの関係の新しい研究方向を探る」
開催予定日:2009年9月24日~9月25日
開催予定地:鳴門教育大学(徳島県鳴門市)
代表者:粕谷英一(九州大学理学研究院生物科学部門・准教授)
- 2) 「スケーリング則に基づく生態系構造・機能の動的理解:個体と生態系をつなぐメタボリズム理論」
開催予定日:2009年9月26日
開催予定地:京都市生態学研究センター
代表者:岩田智也(山梨大学大学院医学工学総合研究部・准教授)
- 3) 「表現型可塑性の生物学」
開催予定日:2009年11月14日~11月15日
開催予定地:北海道大学地球環境科学研究院
代表者:岸田治(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター・助教)

- 4) 「ゲノムと生態系をつなぐ進化研究—環境変動・集団履歴・適応」
開催予定日：2009年12月8日～12月10日（予定）
開催予定地：筑波大学菅平高原実験センター
代表者：田中健太（筑波大学生命環境科学研究科菅平高原実験センター・助教）

〈セミナー〉

- 1) 「アオコの生態・生理・分子系統地理学的研究の現状」
開催予定日：2009年11月14日
開催予定地：京都大学生態学研究センター
代表者：近藤竜二（福井県立大学海洋生物資源学部・准教授）

〈野外実習〉

- 1) 「琵琶湖まるごと陸生生態学実習」
開催予定日：2009年8月21日～8月27日
開催予定地：琵琶湖沖島および京都大学生態学研究センター
代表者：中野伸一（京都大学生態学研究センター・教授）
- 2) 「陸生大型ミミズ類の研究法入門～野外採集から種同定まで～」
開催予定日：2009年9月6日～9月9日
開催予定地：富山大学理学部
代表者：伊藤雅道（駿河台大学経済学部・教授）
- 3) 「安定同位体実習」
開催予定日：2009年9月7日～9月11日
開催予定地：京都大学生態学研究センター
代表者：陀安一郎（京都大学生態学研究センター・准教授）

4. 生態研セミナー

前年度に引き続き、月一回程度（第三金曜日）センター外の方々も自由に参加できるセミナーを開催する。場所は京都大学生態学研究センター第二講義室（会場への

道順は、センターのホームページ参照）の予定である。

5. ニュースレターの発行

センターニュースは、印刷物として年に3回（7月、11月、3月）発行する予定である。また、その内容は、センターのホームページでも公開する。センターの活動紹介の他、研究の自由な討議の場を提供していきたい。

6. 共同利用施設

大型分析機器：DNA 関係では DNA 多型解析、遺伝子転写定量解析用機器など、安定同位体関係ではガスクロ燃焼装置付質量分析計および水同位体比分析用自動前処理装置（MAT252）、元素分析計付質量分析計（コンフロ、delta S）が稼働している。

琵琶湖観測船：高速観測調査船「はす」、「エロディア」が稼働しており、観測調査、実習に利用される。これらの船舶は、旧センター所在地（下阪本）に係留されている。

シンバイオトロン：ズートロン、アクアトロン、水域モジュールが稼働している。

実験圃場林園：センター敷地内には、実験圃場、樹種植栽林園、林木群集実験植物園、CER の森、実験池があり、種々の野外実験に利用されている。

上記施設・設備の利用希望者は、事前に担当者に連絡してください。

DNA シークエンサー等関係：工藤

安定同位体関係：陀安

観測船関係：奥田

シンバイオトロン関係：奥田

実験圃場林園関係：大園

7. 協議委員会、運営委員会

昨年度と同様、それぞれ数回開催される予定である。

センターの動向

- ・北山兼弘教授が、7月1日付けで京都大学大学院農学研究科へ異動しました。
- ・藤田昇助教が、8月1日付けで当センター准教授に昇任しました。
- ・2009年度外国人研究員（客員教授）の Fereidoun Rassoulzadegan 氏（フランス）が4月1日から7月31日まで滞在されました。
- ・荒木希和子氏、小林豊氏が、4月1日付けで研究員（研究機関）として採用されました。

◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。
新年度の会費は12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。
下記会費（地区会費）を次の口座にお振込ください。

郵便振替口座番号 01070-6-19256 口座名：日本生態学会

退会する際は前年度内に退会届を事務局まで提出してください。
会費滞納2年で会誌の発送停止となり、3年で退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

		A 会員	B 会員	C 会員
配布 *	Ecological Research + 生態誌	○	○	
	保全誌		○	○
投稿 **	生態誌	○	○	
	保全誌	○	○	○
大会発表	全セッション	○	○	
	自由集会	○	○	○
総会・委員 (選挙・被選挙権)		○	○	○
年会費	正会員	11,000	13,000	5,000
	学生会員	8,000	10,000	2,500
	団体会員	20,000	22,000	14,000

*Ecological Research および生態誌については2007年度より冊子を必要としない会員への割引（ER 900円、生態誌 600円）を開始しました。すでに会員の方が今後申請される場合は2010年度以降の適用となります。新たに入会される方は入会時に申請があれば入会年度より適用されます。

**Ecological Research への投稿権利は従来通り会員に限定しません。

地区会費（正・学生会員のみ）

北海道地区：200円 東北地区：800円 関東地区：600円 中部地区：0円
近畿地区：400円 中国・四国地区：400円 九州地区：700円

問い合わせ先：日本生態学会事務局

〒603-8148 京都市北区小山西花池町 1-8

Tel&Fax 075-384-0250 E-mail kaiin@mail.esj.ne.jp